

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開

——安徽省宣城市區・池州市、および山東省濟南市區を通して——

植 木 久 行

序 文

中國では歴代、多くの地理書——總志（全國性區域志）・方志（行政區域を單位とする地方志）——が作成され、この部門が占める書籍の分量は、集部の文集と並ぶ雙璧である。しかも中國の地理書は、いわば各地の個性を形成する人・地・事・物の四類を含む、百科全書的なものが多い。行政（治政）に主眼を置く實用的な地理書のほかに、人物を記載し、文學作品（詩文）を引用・集録する、いわば地域の總合的な文化誌（總合文化志的地域敘述）、と呼ぶこともできる地理書が出現している。⁽¹⁾

本稿では、主として大半が現存する歴代の著名な地理總志を用いて、いわゆる詩跡（歴代の詩人たちに詠みつがれて著名

になり、詩歌の新しい創造に點火して表現の核となりうる力をたたえた地名〔古典詩語〕。詩歌との緊密な一體感〔詩歌によって生み出された獨特の連想作用——特定の景物・情趣・發想・テーマ・語彙など〕を伴って認識・理解される場所〔宮殿・高樓・橋・亭・關所・祠廟・舊宅・墳墓・寺院などを含む〕で、單なる名勝古跡とは異なる、詩歌を主體とした概念⁽²⁾が、どのように著録されているのか、現地調査（二〇〇五年・二〇〇六年）に赴いた南の安徽省宣城市區・池州市と、北の山東省濟南市區を例にして考察したい。その結果は、今後、個々の詩跡調査における地理總志利用のあり方を明確に示すことになろう。

第一章 安徽省宣城市區

〔一〕 現存する最古の地理總志は、唐の元和八年（八一三）

中國詩文論叢 第二十六集

に成る李吉甫撰『元和郡縣圖志』四十卷、目錄二卷である。
 (目錄と六卷分缺) 賀次君點校『元和郡縣圖志』(中華書局、中國古代地理總志叢刊、一九八三年) 卷二八、江南道四、宣州宣城縣の條には、「敬亭山は、州の北十二里、即ち謝朓 詩を賦するの所」とある。本書は、地方の文化よりも治政(行政)の參考に供する方面に重點を置いており、こうした藝文(詩文)との關連に言及することは多くなく、この記載は貴重である。後世、敬亭山が、宣城市區を代表する詩跡になることを暗示している。

〔二〕 北宋初期の太平興國年間(九七六—九八四)ごろに成る樂史撰『太平寰宇記』(二〇〇卷、目錄二卷、文海出版社、宋代地理書四種之一、一九六二年。大きな缺落は卷一一九のみ) 卷一〇三、江南西道、宣州宣城縣、敬亭山の條にいう、『郡國志』及び宋の『永初山川記』(南朝・劉澄之撰『永初山川古今記』)に云ふ、宛陵の北に敬亭山有り。山に神祠有り。即ち謝朓神を賽(ま)り(お禮の祭りをする)、詩を賦するの所。其の神は梓華府君と云ふ。頗る靈驗有り、と。『賦詩之所』の語は、前掲の『元和郡縣圖志』の記述を踏襲する。

『太平寰宇記』は、州ごとに風俗・姓氏・人物・土產など、文化的方面を加味した項目を新たに加えて、當地の全貌を表

す「總合的な地域別百科事典」的内容を備えた地理書へと變貌しつつあった。これは、確かに「土地に對する認識が、單なる治政の對象という存在から、その土地の持つ文化的背景までも含めて認識しようという、文化的存在へと變化しつつあることを物語って」(松尾幸忠⁶⁾) いう。しかし藝文に關する部門(門類)はまだ獨立せず、各縣に引く詩句も多くな⁷⁾い。宣城縣の條も、詩文に關する言葉は、これのみである。

〔三〕 續いて北宋中期の元豐三年(一〇八〇)に成る王存・曾肇・李德芻^{すう}撰『元豐九域志』(十卷、王文楚・魏嵩山點校、中華書局、中國古代地理總志叢刊、一九八四年) 卷六、江南東路、宣州宣城縣の條には、昭亭山(敬亭山)や句溪水などの著名な山川を記すが、それを詠んだ藝文(詩文)には言及しない。北宋の紹聖四年(一〇九七)、黃裳の上表に基づいて、『元豐九域志』の簡略な記載を増補することになった。新たに「古蹟」の部門を加えた『新定九域志』⁹⁾ 卷六、宣州、古蹟の條にも、詩跡と呼ぶべき昭亭山や謝公亭などを書き記すが、藝文的な言及はなく、その由來や場所についての簡略な説明にとどまっている。ただ古蹟は詩跡と重なることも多いため、その解説は北宋期の古いものとして貴重である。

『元豐九域志』は、行政區名、地里（四至八到）・疆域・戶數・貢物などを書きこんだ、いわば各地の行政地理状況を知る簡明な手冊（ハンドブック）——行政便覧のようなものであった。當時、各地の歴史的文化的內容（人物・古跡・藝文など）への言及は、まだ地理總志の必須項目である、とは認識されていなかったのである。

〔四〕北宋末の政和年間（一一一一—一一一七）に成る歐陽忞撰『輿地廣記』（三八卷、李勇先・王小紅校注、四川大學出版社、宋元地理志叢刊、二〇〇三年）卷二四、江南東路、宣州宣城縣の條にも、ただ「敬亭山有り」とのみある。これは、『輿地廣記』が歷代の地理沿革（境域の變遷）と山谷・河流、州縣の治所の變遷などの記述を主體とし、藝文（詩文）的視點がなかったためである。

〔五〕南宋期、地理的方面（四至八到、疆域、戶口）の記述は省略されていく。北中國が金の支配下にあつて、淮河以南の地に偏在した南宋時代、公式（官修）の總志は結局編纂されなかったが、民間では注目すべき二つの總志——『輿地紀勝』と『方輿勝覽』が編纂された。學問・文化の進歩にともなつて、皇帝の統治の參考に供するためではない、いわば名勝古跡や人物を中心にした、詩文の創作・鑑賞のための地理知識

中國歷代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

識を重視した、新傾向の詳細な地理事典であつた。『元和郡縣圖志』や『太平寰宇記』などには見られない「詩」（『方輿勝覽』では「題詠」と「四六」の二部門が新たに設けられており、兩書がいわゆる詞章の學に偏つた地理總志であることが象徴している。なお南宋期に編纂された、『乾道四明圖經』（張津等）、『吳郡志』（范成大）、『琴川志』（孫應時、鮑廉）、『嘉泰會稽志』（施宿等）、『剡錄』（高似孫）、『開慶四明續志』（梅應發等）、『景定建康志』（周應合）、『咸淳臨安志』（潛說友）、『咸淳毘陵志』（史能之）などの方志も、獨立した部門（門類）を設けて詩文を集録しており、同じ風氣の中にあることがわかる。（このうち、前五書の成立は、『輿地紀勝』『方輿勝覽』に先行する⁽¹⁰⁾）

寶慶三年（一二二七）の翌年以降に刊行された、婺州金華縣（浙江省金華市）の王象之撰『輿地紀勝』二〇〇卷（三一卷が全缺、一部の缺は一七卷に及ぶ。李勇先校點、四川大學出版社、宋元地理志叢刊、二〇〇五年、嘉定十四年（一二二二）の自序、寶慶三年の李亨⁽¹¹⁾の序）は、南宋期の最も完備した大型の總志（全國性的方志）である⁽¹¹⁾。

南宋領内の府州を一卷ずつに配當し、府縣の沿革、風俗形勝、景物、古跡、官吏、人物、仙釋、碑記、詩、四六等に分

中國詩文論叢 第二十六集

けて記述する。なかでも碑記・詩・四六の三部門は、本書の創設にかかり、きわめて藝文を重視した構成である。⁽¹²⁾

當地を詠んだ作品を集録する「詩」の部門以外にも、景物や古跡などの條に、しばしばそれらを詠んだ詩文を引用するが、境域、戸口、郷里數などは記されていない。ちなみに、四六とは、四六文（四六駢儷文）の基調を成す四字・六字の對句（偶句）を集録した部門である。

王象之の自序によれば、天下の各地に在る山川の精華（風物名勝）と、それを歌詠・記述した詩文を廣く集め、文學者（騷人才士）がこれを見れば、立ちどころに當地の山川の風趣を會得して、作詩作文の際の、無盡藏の資料寶庫にすること⁽¹³⁾にあった。これは、地理總志編纂の目的を從來の國家統治（治政）に對する奉仕から、廣範な文學者（騷人才士）に對する奉仕へと、大きく方針轉換したことを意味していよう。

『輿地紀勝』卷一九、寧國府の條に見える、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。二つの詩跡に關係する詩句の場合、一方の詩跡の條にのみ置いて、重複引用を避けた。

● 所收部門・詩跡・詩人・詩句（引用句數）の順に記述

※ 「」内は、引用者の増補・訂正。

【景物上】

□高齋 ○六朝齊・謝元暉（朧） 「郡内」高齋視事閑坐、

答呂法曹」（詩題のみ、ただし後の【詩】の條に、「郡内高齋」と題して、「窓中列遠岫、庭際俯喬林」を引く）

○唐・劉禹錫 詩「謫宣州崔大夫見寄」 「内史高齋興有餘」（二句）

○唐・韋蘇州「應物」 詩「送五經趙隨登科授廣德尉」（注：趙隨が人名、廣德は宣州の屬縣） 「高齋謁謝公」（一句）

□宛溪 ○唐・李白 詩「題宛溪館」 「吾憐宛溪水「好」、百尺照心明」（二句）

○宋・孫錫 詩「句溪雖可鑑、未若宛溪清」（二句）

□句溪 ○六朝齊・謝元暉（朧） 「將之「遊」湘中「水」、尋句溪」（詩題のみ） 「唐人 留詠多し」として、以下を引く。

○唐・李白 詩「別韋少府」 「洗心句溪月」（二句）

○唐・杜牧 詩「張好好詩」 「沙暖句溪蒲」（二句）

□響山 ○唐・李白「登響山」「九日登山」 「築土接響山、俯臨宛水湄」（二句）（注：唐・權德輿の記も引く）

★「青溪」（＝清溪）の條に、李白らの詩も引かれるが、これは「青溪」（清溪）の流れる土地の管轄が唐代の後期、

宣州から池州へと變化したために生じた誤解にもとづいており、ここでは取り上げない。【詩】の條も誤って引く。

【景物下】

□環波亭 ○宋・梅聖俞（堯臣） 詩「宣州環波亭」 「令

「公」吾太守樂、副「慰」此邦「郡」人望」（二句）

□宛陵堂 ○宋・呂居人（本中） 詩「寄宣城故舊」 「疊

嶂樓前「頭」納涼處、宛陵堂下探梅時」（二句）

□資深堂 ○宋・郭祥正（功甫） 詩「感懷、贈李公擇」

「君來宣城幕、衆謂得杜牧。我適遊昭亭、林中騎白鹿。時

趁資深堂、遇君亦休沐」（六句）

□曲肱亭 ○宋・黃魯直（庭堅） 「題宛陵張待舉曲肱亭」

詩 「仲蔚蓬蒿宅、宣城詩句中。「この後、二句脱」 偃

蹇勳業外、嘯歌山水重。…」（八句）（注：【詩】の條にも、

冒頭の二句を引く）

□平雲閣 ○宋・郭祥正（功甫） 「賦平雲閣」 詩 「宣城多

名山、詩人舊經歷。獨無平雲篇、疑怯作者敵」（四句）

□秋水閣 ○宋・郭祥正（功甫） 「題秋水閣」 詩「偶登秋水

閣、靜吟秋水篇。…」（四句）

□列岫亭 ○宋・郭祥正（功甫） 「列岫亭」 詩 「謝公遺句

惜埋沈、更作新定一百尋。…」（四句）（注：謝朓「郡內高

中國歷代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

齋視事閑坐、答呂法曹」の「窓中列遠岫」にもとづく）

★資深堂・曲肱亭・平雲閣・秋水閣・列岫亭は、その所在地が明記されないが、ひとまず宣城市區内にあったものと考えておく。

□陵陽山 ○宋・郭祥正（功甫） 「雙溪樓「宣州雙溪閣夜宴、

呈太守金光祿」 詩 「陵陽之「三」峰壓千里、百尺危樓

勢相倚」（二句）

□敬亭山 ○唐・李白 詩「獨坐敬亭山」 「相看兩不厭、

只有敬亭山」（二句）

○唐・李白 詩「登敬亭山、南望懷古、贈寶主簿」 「敬亭

一迴首、目盡天南端」（二句）

★所引の『圖經』に「即ち謝朓 詩を賦するの所」とあるが、六朝齊・謝朓自身の「敬亭山」（「遊敬亭山」）詩そのものは引用しない。また、次の項目に昭亭山の名が見えるが、昭

亭山は敬亭山の別稱である。（昭亭山には、詩が引かれていない）

□雙羊山 ○宋・梅聖俞（堯臣） 詩「早春田行」 「風雪雙

羊路、梅花山下村」（二句）

□開元寺 ○唐・杜牧「題宣州開元寺」 詩 「南朝謝朓城、

東吳最深處。…」（四句）

【古跡】

中國詩文論叢 第二十六集

□謝朓北樓 唐・李白「秋登宣城謝朓北樓」詩 「誰念北樓上、臨風懷謝公」(二句)

【人物】楊處士の條、唐・許渾「寄昭亭楊處士」：「…謝公樓上晚花發、楊子宅前春草深」(四句)

★參考【碑記】の條に、『宣城詩』(唐人已前の詩篇、編集の人の姓名を失す)を著録。

【詩】

以下、宣城縣を含む寧國府内に關する詩が、基本的に作者の生存時代に從つて集録されており、前掲の□印のごとき、山川・堂亭・寺觀の名稱を持たない。それでここでは、詩跡ごとに分類して示す。その名稱は、前引の項目と重複するものを含む。

□敬亭山(前掲二首) ○唐・李白「至敬亭山」[自梁園至敬亭山、見會公、談陵陽山水、:]「(會公は僧)「稠疊千萬峰、相連入雲去」(二句)「水國饒英奇、潛光臥幽草」(二句)(注：それぞれ獨立して示す)

○唐・李白「登敬亭山」[登敬亭山、南望懷古、贈寶主簿]「(前出)「敬亭一迴首、目盡天南端。…」(四句)

○唐・李白 詩「寄從弟宣州長史昭」[爾佐宣城郡、守官清且閑。常誇雲月好、邀我敬亭山] (四句)

○唐・李白「別韋少府」「洗心句溪月、清耳敬亭猿」(上句は□句溪の條に前出) (二句)

○唐・李白「觀胡人吹笛」 「十月吳山曉、梅花落敬亭」(二句)

○唐・李白「敬亭山」[獨坐敬亭山] 「衆鳥高飛盡、孤雲獨去閑。相看兩不厭、只有敬亭山」(全四句。前掲の□敬亭山の條には、後半二句のみを引く)

○唐・孟浩然 詩「夜泊宣城界」 「石逢羅剎礙、山泊敬亭幽。…」(四句)

○唐・白居易「題宣城郡齋」[宣州崔大夫閣老、忽以近詩數十首見示：:] 「謝元暉沒吟聲寢、郡閣寥寥筆硯閑。…」

再喜宣城章句動、飛觴遙賀敬亭山」(全八句)(注：白居易の自注に、「謝宣城(朓)の『郡內』詩に云ふ、『窓中に遠岫列なる』と」[謝に又た『敬亭山に題す』詩有り。並びに『文選』に見ゆ]とある)

○唐・劉禹錫「九華歌」[山] 「君不見」敬亭之山黃索漠、兀如斷岸無稜角。宣城謝守一首詩、遂使聲名齊五岳」(四句)

○唐・劉禹錫 詩「訓宣州崔大夫見寄」 「遙想敬亭春欲暮、百花飛盡柳花初」(注：前掲の□高齋の條に、本詩の一

句を引くが、この四句は見えない)

○唐・劉長卿「行至宣城」 「敬亭暮色晴臨道、句水寒流澹不波」(四句)(注:『全唐詩』に未見?)

○唐・杜牧 詩「自宣州赴官入京、逢裴坦判官…」 「敬亭山下百頃竹、中有詩人小謝城」(二句)

○唐・杜牧 詩「偶遊石盍僧舍」 「敬亭草浮光、句汴水解脈」(二句)

○唐・韋應物「送宣城」 「錄事」 「… 雪林謝家宅、山水敬亭祠」(四句)

○唐・趙嘏「宛陵望月」 「寄沈學士」 「一川如畫敬亭東、待詔閑遊處處同。…」(四句)

○唐・陸龜蒙「寄友人」 「寄友」 「敬亭寒夜溪聲裏、同聽先生講太元」(四句)

○宋・蹇昌齡 詩 「我聞敬亭無足取、岑寂況在東南涯。聲名一日遍宇宙、正以謝守詩瑰奇」(四句)

○宛溪(前掲二首) ○唐・李白 詩「寄崔侍御」 「宛溪霜夜聽猿愁、去國長爲不繫舟」(二句)

○唐・李白 詩「題宛溪館」 「吾憐宛溪水」(好)、百尺照心明」(注:「宛溪」の條に前出)(二句)

○謝朓北樓(前掲一首、補一首) ○唐・李白「秋登宣城謝朓

中國歷代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開(植木)

北樓」 「江城如畫裏、山曉望晴空。…」(六句)(注:前掲の「謝朓北樓」の條に引く本詩の「誰念北樓上、臨風懷謝公」は尾聯。ここでは、それ以外の六句を引く)

○唐・鄭準「題宛陵北樓」 「… 若使「遣」謝宣城不死、必應吟盡夕陽川」(四句)

○唐・鮑溶「北樓」 「宣城北樓、昔從順陽公會於此」 「詩樓郡城北、窓牖敬亭山。…」(四句)

○開元寺(前掲一首) ○唐・杜牧「題宣州開元寺水閣」 「六朝文物草連空、天澹雲閑今古同。…」(全八句)

○唐・杜牧「題「宣州」開元寺」 「南朝謝朓城、東吳最深處」(二句。前掲の「開元寺」の條に見える)

○唐・杜荀鶴「題開元寺」 「門閣」 「一登高閣眺清秋、滿目風光盡勝遊。何處畫橈尋綠水、幾家鳴笛咽紅樓」(四句)

○唐・趙嘏「題開元寺水閣」 「年來獨向此遊頻、謝氏青山與寺隣。…波穿十里橋連寺、絮壓千家柳送春」(六句)(注:『全唐詩』に未見。『全唐詩補編』四一五頁所收)

○高齋(前掲三首) ○唐・韋應物 詩「送五經趙隨登科授廣德尉」 「獨往宣城郡、高齋謁謝公」(二句)(注:前掲の「高齋」の條には、下句のみを引く)

○唐・韋應物 詩「題宛溪館」 「吾憐宛溪水」(好)、百尺照心明」(注:「宛溪」の條に前出)(二句)

○謝朓北樓(前掲一首、補一首) ○唐・李白「秋登宣城謝朓

中國歷代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開(植木)

中國詩文論叢 第二十六集

□疊嶂樓 ○宋・蘇爲「宣城」 「宣城花疊嶂、樓前簇綺霞。…」(四句)

○宋・盧革 詩 「疊嶂最驚目、排青隱星絡。…」(四句)
 (注:『方輿勝覽』卷一五、寧國府、山川の條に、「疊嶂、陵陽山の上に在り」とあるが、『輿地紀勝』中には見えない)

○宋・蘇文定公(轍) 詩「次韻侯宣城疊嶂樓雙溪閣長篇」
 「仰攀疊嶂高、俯閣雙溪美」(二句)

○宋・林希「疊嶂樓有懷吳門朱伯厚」詩 「虎丘換得敬亭山、句水松陵數舍間。…」(四句)

★參考【碑記】の條に、「題疊嶂樓詩」(原注:南齊の謝朓)、「題疊嶂樓壁」(原注:唐の獨孤霖)とある

□句溪(前掲三首) ○宋・郭祥正(功甫) 詩「遊陵陽、謁王左丞代、先書寄獻」 「昭亭扶春入畫戟、句溪洗月供吟盃」(二句)

これによれば、宣城を代表する詩跡は敬亭山であり、ついで謝朓北樓とその後身にあたる疊嶂樓(唐の刺史獨孤霖の再建・改稱)であった。次に續くのが開元寺や宛溪である。なおそれらの詩跡は、唐の李白や杜牧(觀察使の幕僚として宣城に二度滞在)によって詠まれて定着化し、北宋の郭祥正(近くの當塗出身で青山に住み、李白の後身と評された詩人、『青山集』が

ある⁽¹⁵⁾)は、地元(宣城)出身の梅堯臣よりも當地の堂亭を多く詠んでいる。前掲の項目のうち、環波亭・資深堂・平雲閣・秋水閣・列岫亭などの亭閣は、後世ほとんど詠み繼がれず、環波亭はむしろ後述する濟南のそのの方が知られている。この意味では、いわゆる詩跡とは見なしがたい。

「六」『輿地紀勝』の刊行からやや遅れた嘉熙三年(一二三九)ごろ、それを簡略化した形態を持つ地理總志が出版されはじめた。⁽¹⁶⁾建寧府崇安縣(福建省武夷山市)の祝穆撰『新編四六必用方輿勝覽』(嘉熙三年の呂午の序と自序を持ち、前集四三卷、後集七卷、續集二〇卷、拾遺一卷から成る)が、それである。本書も『輿地紀勝』と同様に、境域・戸口・田賦などの部門を缺く一方、詩文・記序を多く引用・集録した、詩文の創作・鑑賞のための地理事典であるが、四六の部門だけは、かえって『輿地紀勝』よりも詳しく、所收の駢語(對語)は、作者自身が各種の資料に基づいて新たに編修したものを多く含む。(他方、『輿地紀勝』所收のそれは、他の人が作成したものを集録する) 四六の文體を作成する用途に應ずることが編纂の主眼であったことは、書名中の「四六必用」の語によって明白である。當時、四六の文體は、科擧の受験だけでなく、天子の詔敕の執筆にも用いられ、さらには社會に通行する書

啓・祭誄・碑文等にも使用されていた。⁽¹⁷⁾（本書には、縣沿革と碑記の兩項はない）。

また『輿地紀勝』に引用・集録される詩文のうち、文はおおむね摘録であるが、『方輿勝覽』は詩・文の異同を問わず、全篇を引くことが多い。そして【題詠】の部門以外は、詩題を記さないケースが大半である。

原刻本刊行の三十年後、子の祝洙増訂の『新編方輿勝覽』七〇巻が咸淳三年（一二六七）に出版され、この系統の増訂本が宋末・元明期廣く流布していく⁽¹⁸⁾。

ここでは、増訂本『方輿勝覽』（全七〇巻、施和金點校、中華書局、中國古代地理總志叢刊、二〇〇三年）を使用する。南宋の領域一七路を府州郡に分け、まず古來の建置沿革、そして「事要」として郡名・風俗・形勝・土產・山川・（陵寢・堂舍〔堂院〕・樓閣〔樓臺〕・臺榭〔亭榭〕・佛寺・道觀・祠墓・古跡・名宦・人物・題詠〔外邑〕・四六などの順で記されている。なかでも風俗・形勝や題詠・四六等の詳述に本書の特色がある。『輿地紀勝』を踏襲した箇所（特に建置沿革の部門）も存在するが、單なるその節略・改編本ではなく、編者が長年努力して獨自の編纂體例を備えた新著であつた。⁽¹⁹⁾ ちなみに「題詠」門には、府・州（軍・監）の治所が置かれた土地

中國歷代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

の風物名勝に關する詩句を收め、時おりその後に見える「外邑」の部門は、その治所以外の、周圍に廣がる府・州に所屬する各縣の、風物名勝に關する詩句を收めている。⁽²⁰⁾

『方輿勝覽』卷一五、寧國府の條に見える、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。

● 所收部門・詩跡・詩人・詩句（引用句數）の順に記述

※ 「」内は、引用者の増補・訂正。また◎は『輿地紀勝』所收の詩。

【山川】

□敬亭山 ○六朝齊・謝元暉（朏）「敬亭山」詩 「茲山亘百里、合沓與雲齊。……」（全二〇句）

★もと作者名を謝靈運に誤る。この影響は大きく、明代の『寰宇通志』『大明一統志』も同じく誤る。『方輿勝覽』の影響の大きさを物語る一例である。

◎唐・李白 詩「登敬亭山、南望懷古、贈竇主簿」 「敬亭一回首、目盡天南端」（全二〇句。『輿地紀勝』は、二句・四句の引用）

◎唐・劉禹錫 詩「九華山」 「君不見」敬亭之山黃索漠、兀如斷岸無稜角。宣城謝守一首詩、遂使聲名齊五嶽」（四句）

中國詩文論叢 第二十六集

★次の項目に昭亭山の名が見えるが、昭亭山は敬亭山の別称である。この點は『輿地紀勝』に同じく、詩も引かれていない。

□雙羊山 ◎宋・梅聖俞（堯臣） 詩「早春田行」「風雪雙羊路、梅花山下村」

□響山 ◎唐・李白 詩「九日登山」 「築土接響山、俯臨宛水湄」

□雙溪 ◎宋・楊廷秀（萬里） 詩「曉過花橋、入宣州界」「敬亭・宛陵故依然、疊嶂・雙溪阿那邊。謝守不生梅老死、

倩誰海內掌風煙」（注：謝守は謝朓、梅老は梅堯臣）

□宛溪 ◎唐・李白 詩「題宛溪館」 「吾憐宛溪水「好」、百尺照心明」

★清溪の條に、李白「清溪行」詩を引くが、これは『輿地紀勝』と同じ誤り。

【堂亭】

□宛陵堂 ◎宋・呂居人（本中） 詩「寄宣城故舊」 「疊

嶂樓前「頭」納涼處、宛陵堂下探梅時」

□曲肱亭 ◎宋・黃魯直（庭堅）「題宛陵張待舉曲肱亭」詩「仲蔚蓬蒿宅、宣城詩句中。「四句脫」 晨鷄催不起、擁被聽松風」（四句）

□謝公亭 ○唐・李白 詩「謝公亭」 「池花春映日、窓竹夜鳴秋。謝令「亭」離別處、風景亦「每」生愁」（注：後半の二句が詩の冒頭。そして二句の後に前半の二句が来る）

□高齋 「謝元暉に詩有り」とのみ記し、詩は引用しない。

【樓閣】

□疊嶂樓 唐の獨孤霖の文のみ引き、詩は引用しない。

□北樓 ◎唐・李白 詩「秋登宣城謝朓北樓」 「江山「城」如畫裏、山晚望晴空。：誰念北樓上、臨風懷謝公」（全八句）

【寺觀】

□開元寺 ◎唐・杜牧 詩「題宣州開元寺水閣」 「六朝文物草連宮「空」、天淡雲閑今古同。：」（全八句）

【題詠】

以下、宣城縣を含む寧國府内に關係する詩が、基本的に作者の生存時代に從つて集録され、前掲の□印のごとき、山川・堂亭・寺觀の名稱を持たない。それでここでは、詩跡ごとに分類して示す。その名稱は、前掲のものと重なるものを含む。なお『輿地紀勝』の【詩】は、一首ごとに引用詩句を列ねた後、作者と詩題が小字で注される。これに對して、『方輿勝覽』の【題詠】は、詩中の名句（二句）をかけ、作者、詩

題、残りの詩句が小字で注され、形態を異にする。

□宛水（＝宛溪） ○宋・黃魯直（庭堅） 詩「送舅氏野夫

之宣城」 「… 晚樓明宛水、春騎簇昭亭」（四句）

□疊嶂樓 ○宋・林希「疊嶂樓有懷吳門朱伯厚」詩「虎

丘換得敬亭山、句水松陵數舍間。…」

●『方輿勝覽』は『輿地紀勝』よりも小さな地理總志であるため、詩跡（その候補を含む）の名稱の數量と引用する詩句も格段に少ない。たとえば、敬亭山に關する詩數の場合、『輿地紀勝』は（重複を除いて）一七首、『方輿勝覽』は三首である。しかし『輿地紀勝』には見えない詩句が散在するだけでなく、謝公亭のごとき詩跡が初めて取り上げられており、無視できない參照價值を備えている。重要な詩跡に絞り込まれている點も評價すべきであろう。

〔七〕 大徳七年（一二〇三）に成る官修『大元一統志』（第二次本）一三〇〇卷は、明代に散佚し、今日傳わる趙萬里校輯『元一統志』（中華書局、一九六六年。しばらく汲古書院、一九七〇年影印本による）には、寧國路の條を缺いており、著錄狀況は全く未詳である。

〔八〕 小型の元代地理總志として、大徳七年（一二〇三）の

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

政區を基本とした元の劉應李原編・詹有諒改編『大元混一方輿勝覽』が今日傳わる。これは本來、元代の類書『新編事文類聚翰墨大全』（大徳十一年（一二〇七）初刊、全二〇八卷、宋末元初の劉應李編）の一部分（地理門の一部）として編撰されたものであり、元の泰定元年（一二三四）に刊行された、詹有諒改編『新編事文類聚翰墨大全』本（全二二五卷）が元末以降流布した。現在傳存する單刻本も、その地理部分のみを抽出した三卷本である。⁽²¹⁾

本書は、その書名から連想されるように、南宋の舊領に關しては『方輿勝覽』の記述を摘録し、北方については歴代の地志・圖經・舊籍などを用いて作成し、北方の關外や西南地區は、史料が比較的新しいとされている。

『大元混一方輿勝覽』（郭聲波整理本）卷下、寧國路の條には、以下の如く詩跡に關する詩句が見える。

【景致】

□敬亭山 「謝元暉に詩有り」とのみあり、詩句は引かれていない。

□北樓 ○唐・李白 詩「秋登宣城謝朓北樓」 「江山「城如畫裏、山晚望晴空。…誰念北樓上、臨風懷謝公」『輿地紀勝』『方輿勝覽』と同じ全八句）

【題詠】

表記のしかたは、『方輿勝覽』の【題詠】と同じく、名句（二句）をかかげ、作者、詩題、それを含めた詩句（ただし『方輿勝覽』よりも極めて簡略）が、小字で注される。

□宛水（＝宛溪） ○宋・黃庭堅 詩「送舅氏野夫之宣城」

「晚樓明宛水、春騎簇昭亭」（二句。『方輿勝覽』にも見える）

本書の南方部分は、基本的に『方輿勝覽』の極端な簡略であるため、詩跡考察における価値に乏しい。ただこの極端な簡略にも生き残る詩跡の名稱は、注目されてよい。

【九】 明代最初の地理總志は、景泰七年（一四五〇）に成る官修『寰宇通志』（陳循等編、一一九卷）である。府・州ごとに、その建置沿革・郡名・山川・形勝・風俗・土産・宮殿・公廨・學校・書院・樓閣・館驛・堂亭・池館・臺榭・井泉・關隘・寺觀・祠廟・府第・橋梁・陵墓・古跡・名宦・遷謫・人物・科甲・題詠の各項に分けて詳述する。

本書の編纂は、初め「事實を採る凡例は、一に祝穆の『方輿勝覽』に准ず」であったが、後に方針變更がなされたという（明・葉盛『水東日記』卷三五）。しかし譚優學の指摘するごとく、景物方面の部門（門類）が細かいこと、各巻の終りに

題詠の部門を設けること、記敘文は全篇を收録することなど、『方輿勝覽』の編纂形態を踏襲する所が少なくない。本書は、元・明の稀覯本を影印した民國の鄭振鐸編『玄覽堂叢書續集』に收められて、始めて参照できるようになった地理總志である。

『寰宇通志』（明景泰間內府刊初印本を影印した、國立中央圖書館出版、正中書局印行『玄覽堂叢書續集』、一九八五年）卷一一、寧國府の條に見える、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。

【山川】

□陵陽山 ○宋・郭祥正（功甫） 詩「宣州雙溪閣夜宴、呈

太守金光祿」 「陵陽三峰壓千里、百尺危樓勢相倚」（『輿地紀勝』にも見える）

□響山 ○唐・李白 詩「九日登山」 「築土接響山、俯臨

宛水湄」（『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える）

□雙羊山 ○宋・梅堯臣 詩「早春田行」 「風雪雙羊路、

梅花山下村」（『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える）

□敬亭山 ○唐・李白 詩「獨坐敬亭山」 「相看兩不厭、

只有敬亭山」（『輿地紀勝』にも見える）

○唐・李白 詩「自梁園至敬亭山、見會公、談陵陽山水、」

「稠疊千萬峰、相連入雲去」(『輿地紀勝』にも見える)

□宛溪 ○唐・李白 詩「題宛溪館」 「吾憐宛溪水」「好、

百尺照心明」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

□句溪 ○唐・李白 詩「別韋少府」 「洗心句溪月」(一

句。『輿地紀勝』にも見える)

★清溪の條に李白「清溪行」を引くが、これは『輿地紀勝』

『方輿勝覽』と同じ誤り。

【樓閣】

□北樓 ○唐・李白 詩「秋登宣城謝朓北樓」 「誰念北

樓上、臨風懷謝公」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

★「(唐の) 刺史獨孤森、名を疊嶂樓に改む」と注されて

おり、疊嶂樓と謝朓北樓との関連に言及した記述として注

目される。

□雙溪閣 ○宋・蘇轍 詩「次韻侯宣城疊嶂樓雙溪閣長篇」

「仰攀疊嶂高、俯閣雙溪美」(『輿地紀勝』「本稿では、□疊嶂

樓の條」にも見える)

【堂亭】

□宛陵堂 ○宋・呂居人(本中) 詩「寄宣城故舊」 「疊

嶂樓前「頭」納涼處、宛陵堂下探梅時」(『輿地紀勝』『方輿

勝覽』にも見える)

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開(植木)

□謝公亭 ○唐・李白 詩「謝公亭」 「謝公「亭」離別處、

風景亦「每」生愁」(『方輿勝覽』にも見える)

【寺觀】

□景德寺 (＝開元寺) 「晉は永安と名づけ、唐は大雲と名

づく。杜牧・許渾・趙嘏・杜荀鶴、皆な題詠有り。宋の景

徳中、今の名に改む。元(のとき)燬かる」とあるが、唐

代の開元寺の名に言及しないのは不適切である。また詩句

は全く引用しない。許渾以外の詩は『輿地紀勝』に見え、

『方輿勝覽』は杜牧の詩のみ収める。

【墳墓】

□蔣徵君墓 ○唐・李白 詩「宣城哭蔣徵君華」 「敬亭

山下墓「埋玉樹」、知是蔣徵君」(二句。本詩は『輿地紀勝』

『方輿勝覽』の兩書に見えない)

【題詠】

この部門(門類)の名―題詠は、『方輿勝覽』と同じであ

る。收録する詩は摘録ではなく、詩全體を注するが、見出し

は『方輿勝覽』のような詩中の名句(二句)ではなく、詩題

を極端に簡略化したケースが多い。本條では、前掲の□印の

ごとき、山川・樓閣・堂亭・寺觀の名稱を持たないので、詩

跡ごとに分類して示す。

中國詩文論叢 第二十六集

□敬亭山 ○六朝齊・謝元暉（朏）「敬亭山」詩 「茲山亘百里、合沓與雲齊。…」（全二〇句。『方輿勝覽』にも見える）

★作者名を劉宋（六朝宋）の謝靈運に誤る。これは、すでに述べたごとく、『方輿勝覽』の誤りを受けたものである。

○唐・李白 詩「登敬亭山、南望懷古、贈竇主簿」 「敬亭一回首、目盡天南端。…」（『方輿勝覽』と同じ全二〇句。『輿地紀勝』は摘録）

□北樓 ○唐・李白 詩「秋登宣城謝朓北樓」 「江城如畫裏、山晚望晴空。…」（全八句。『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える。すでに本書の【樓閣】の條に最後の二句を引く）

●『寰宇通志』には、謝公亭の項目を立てるなど、『方輿勝覽』の影響が大きい。しかし『方輿勝覽』には見えず、『輿地紀勝』に見える詩句をも引用する。また蔣徵君墓のごとく新たに掲げた項目もあるが、それ自體は詩作の繼承性に乏しい。

「一〇」 明の天順五年（一四六一）に成る『大明一統志』（呂原等編、九〇卷）は、復位した英宗が、景泰帝の敕命によって編修された『寰宇通志』を抹殺すべく、「繁簡 宜しきを失い、去取 未だ當たらず」と厳しく批判して、『寰宇通志』

の完成後、わずか二年あまりで、新たな總志の編纂を命じたものである。

しかし纂修者には重複が多く、『大元一統志』の體例を踏襲して完成したとされる内容も、實質的には『寰宇通志』を改編したものと評してよい。確かに景物方面の部門（門類）を合併したり、題詠門を削って『方輿勝覽』以來の地理總志の形態を改變したが、陵墓・祠廟・寺觀・橋梁・學校・公署などの部門は、基本的に『方輿勝覽』が確立した部門と同じである。（この點は『大清一統志』⁽²³⁾も同様）本書の構成形態は、『寰宇通志』と大きな差異はなく、詞章の學に偏よった、いかえれば詩文の創作・鑑賞のための地理知識に重點を置いた最後の地理總志、と評してよいだろう。

この『大明一統志』が頒行されて以降、『寰宇通志』の版本は破毀されてしまい、『大明一統志』のみが廣く流布する結果になった。明の有名な旅行家徐霞客は、本書を旅の廣域ガイドブックとして頻繁に活用していたという。⁽²⁴⁾

『大明一統志』（和刻本）卷一五、寧國府の條で、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。

【山川】

□陵陽山 ○宋・郭祥正（功甫） 詩「宣州雙溪閣夜宴、呈

太守金光祿」〔陵陽三峰壓千里、百尺危樓勢相倚〕（『輿地紀勝』にも見え、『寰宇通志』と同じ）

□響山 ○唐・李白 詩「九日登山」〔築土接響山、俯臨宛水湄〕（『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』と同じ）

□雙羊山 ○宋・梅堯臣 詩「早春田行」〔風雪雙羊路、梅花山下村〕（『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』と同じ）

□敬亭山 ○六朝齊・謝元暉（朓）「敬亭山」詩「茲山亘百里、合沓與雲齊。……」（一四句。『方輿勝覽』にも見える）

★作者名を劉宋（六朝宋）の謝靈運に誤る。これは、すでに述べたごとく、『方輿勝覽』の誤りを受けたものの、『寰宇通志』と同じである。

□宛溪 ○唐・李白 詩「題宛溪館」〔吾憐宛溪水「好」、百尺照心明〕（二句。『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』も同じ）

□句溪 ○唐・李白 詩「別韋少府」〔洗心句溪月〕（二句。『輿地紀勝』にも見え、『寰宇通志』と同じ）

【宮室】

□北樓 ○唐・李白 詩「秋登宣城謝朓北樓」〔江城如

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

畫裏、山晚望晴空。……〕（全八句。『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』も同じ）

★「（唐の）咸通中、刺史獨孤霖、名を疊嶂樓に改め、自ら記を爲る」と注され、『寰宇通志』とほぼ同じである。

□宛陵堂 ○宋・呂居人（本中） 詩「寄宣城故舊」〔疊嶂樓前「頭」納涼處、宛陵堂下探梅時〕（『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』も同じ）

□謝公亭 ○唐・李白 詩「謝公亭」〔謝公「亭」離別處、風景一「每」生愁〕（『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』も同じ）

★【宮室】の部門に「敬亭」と題して、唐・李白 詩「登敬亭山、南望懷古、贈竇主簿」〔敬亭一回首、目盡天南端。……〕（『方輿勝覽』『寰宇通志』と同じ全二〇句。『輿地紀勝』は摘録）を引くが、敬亭という建物はなく、山の名である。これはおそらく、『寰宇通志』【題詠】の條に「敬亭」の見出しで引く李白詩を、ここに誤引したのであろう。敬亭の語に「亭」字がついているため、建物の名と考えたのであろうか。杜撰である。

【陵墓】

□蔣華墓 ○唐・李白 詩「宣城哭蔣徵君華」〔敬亭山下

中國詩文論叢 第二十六集

墓「埋玉樹」、知是蔣徵君」（詩句は『寰宇通志』に見えるものであり、『輿地紀勝』『方輿勝覽』の兩書には見えない）

●『大明一統志』では、題詠門自體は削られたが、『寰宇通志』の題詠門に收められていた詩は、他の部門のなかに引用されており、詞章の學に偏向する特徵自體には大きな異同がない。従って詩跡考察の面では、『寰宇通志』『大明一統志』のうち、一方を見さえすれば、ほぼ支障がないといえよう。

「一一」 清の道光二十二年（一八四二）には、官修『嘉慶重修一統志』（嘉慶二十五年（一八二〇）を内容の下限とする『大清一統志』の第三次、最終増訂版。五六〇卷、中華書局、中國古代地理總志叢刊、一九八六年。一九三四年、四部叢刊續編に影印した寫本の重印・改裝本である）が成る。

本書は、歴代の地理總志の最高レベルに位置し、「行政區畫をコードにした、人文・歴史地理的百科全書として、巨大な中國文明の財寶がこの中に藏されている」（梅原郁「Ⅱ 歴史地理學」と評された書物である。ただ詩跡や詩句の引用という觀點からいえば、詞章の學としての地理總志は『大明一統志』で終止符が打たれたため、見るべき處は少ない。しかし詩跡となった地名の考證や建物の場所に關する詳細な記述

は、充分參照すべき價值を持つ。

『嘉慶重修一統志』（『大清一統志』卷一一五〜七、寧國府の條に見られる、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。

【山川】

□雙羊山 ○宋・梅堯臣 詩「早春田行」 「風雪雙羊路」

（一句。『輿地紀勝』『方輿勝覽』『寰宇通志』『大明一統志』に見える）

□敬亭山 『元和郡縣圖志』の「敬亭山は、州の北十二里、即ち謝朓 詩を賦するの所」を引くが、詩そのものは引用されない。しかし「一に昭亭山と名づく」と明言した點は、本書が地理的考察に有用であることを明確に表している。宛溪・句溪なども、水路の考證は詳細であるが、全く詩を引いていない。

【古跡】

□北樓 ○唐・李白 詩「秋登宣城謝朓北樓」 「誰念北

樓上、臨風懷謝公」（『大明一統志』をそのまま引く）

□雙溪閣 ○宋・蘇軾 詩「次韻侯宣城疊嶂樓雙溪閣長篇」

「仰攀疊嶂高、俯閣雙溪美」（『輿地紀勝』『寰宇通志』に見える）

●『嘉慶重修「統志」』（『大清「統志」』は、詩跡研究の觀點からいえば、『輿地紀勝』『方輿勝覽』『寰宇通志』『大明「統志」』よりも利用價值に乏しいが、詩跡の存在する場所を確認する場合、必讀すべき文獻である。

第二章 安徽省池州市

「一」 唐の李吉甫撰『元和郡縣圖志』卷二八、江南道四、池州秋浦縣の條には、池州市（舊・貴池市）内における秋浦水などを收録するが、詩との關連に言及する記事は見えない。

北宋初期に成る樂史撰『太平寰宇記』卷一〇五、江南西道、池州貴池縣の條にも、池州市を代表する詩跡の一つ、齊山などが見えるが、やはり詩文との關連に言及しない。續く北宋中期の王存・曾肇・李德裕撰『元豐九域志』卷六、江南東路、池州貴池縣の條にも、『新定九域志』卷六、池州、古蹟の條にも、藝文的言及はない。北宋末の歐陽忞撰『輿地廣記』卷二、江南東路、池州貴池縣の條にも、同じく詩跡關連事項は見えない。

「二」 南宋の王象之撰『輿地紀勝』卷二二、池州の條に見える、池州市の詩跡及びその候補に關するものは、以下の如

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

くである。二つの詩跡に關係する詩の場合、一方の條に置いた。

● 所收部門・詩跡・詩人・詩句（引用句數）の順に記述
※ 「」内は、引用者の増補・訂正。

【景物上】

□齊山 ○唐・杜牧 詩「九日齊山登高」 「與客」携壺

上翠微」（即ち杜牧の九日登る所、杜牧の所謂「壺を携へて翠微に上る」、是れなり、と注される）

○宋・郭祥正（功甫）「追和李白秋浦歌「十七首」」（其の八）「秋浦試北望、參天齊山奇。緣何謫仙客、名作碧蓮枝」（全四句。謫仙客は李白）

□清溪 ○唐・劉長卿「北歸」次秋浦界清溪館」詩

（詩句を引かない）

○宋・東坡（蘇軾）「清溪」詞「清溪行」（詩句を引かない）

○宋・程師孟 詩「弄水亭」「昨夜清溪明月裏」（二句。後の【總池州詩】にも見える）

○唐・杜牧 「池州」清溪」詩 「弄溪終日到黃昏、照數秋來白髮根。……」（全四句）

【景物下】

□九峰樓 ○唐・杜牧之（牧）「登池州九峰樓「寄張祜」」

中國詩文論叢 第二十六集

(詩句を引かない)

□弄水亭 ○唐・杜牧之(牧)「春末題池州」弄水亭」(詳しくは【詩】門に見ゆ、と注される)

○宋・郭祥正「和倪「衍字」敦復留題池州弄水亭」 「我寄江南隱、數爲弄水遊。讀君弄水篇、感慨「慨」攀巢由。…」(八句)

□翠微亭 ○宋・郭祥正(功甫)「追和李白秋浦歌「十七首」」(其の十六) 「半空翠微亭、翫月動經宿。更待雨中來、林看銀竹」(全四句)

□貴池亭 ○唐・杜牧之(牧) 詩「題池州貴池亭」 「勢比凌歊宋武臺、分明百里遠帆開。蜀江雪浪西江滿、強半春寒去却來」(全四句)

○宋・郭祥正「追和梅侍讀」題貴池亭「元韻」 「寺插孤峰壓貴池、幽軒占勝敞雙扉。…」(四句)

□水車嶺 ○宋・郭祥正「追和李白秋浦歌「十七首」」(其の九) 「萬丈水車嶺、還如九疊屏。北風來不斷、六月亦水生」(全四句)

□白筍陂 ○唐・李白「遊秋浦白筍陂」(二首) 「何處夜行好、月明白筍陂。山光搖積雪、猿影挂寒枝」 「白筍夜長嘯、爽然溪谷寒。魚龍動陂水、處處生波瀾」(一首八句の

うち、前半四句をそれぞれ引く)

□金碧洞 ○唐・杜牧之(牧) 詩 「廢寺碧溪上、今爲太平寺」(『全唐詩』未收?)

○唐・杜牧之(牧) 詩「遊池州林泉寺金碧洞」 「袖拂霜林下石稜、潺湲聲斷滿溪水。携茶臘月遊金碧、合有文章病茂陵」(全四句)

□玉鏡潭 ○唐・李白「秋浦宴「與周剛清溪玉鏡潭宴別」」 「清溪玉鏡潭「席月開清罇」、溪當大樓南。溪水正南奔、廻作玉鏡潭」

●『輿地紀勝』では、當地に關係する詩を一般に【詩】の部門に一括して集録している。なかでも集中して詠まれた場所や建物、いわゆる著名な詩跡を持つ場合には、それを獨立した項目として設けるとときがある。この池州の條の場合は、【總池州詩】【秋浦詩】【蕭相樓詩】【齊山詩】【九華山詩】に分かれている。多數の詩を集録した、詩跡ごとの區分は、唐代以降の地理總志のなかでは唯一のことであり、詩跡研究の觀點からは特に注目に値する。なお【總池州詩】の條では、秋浦・蕭相樓・齊山・九華山(これは、池州市以外の地)以外の、池州内に屬する詩が、基本的に作者の生存時代に従って

集録され、前掲の□印のごとき、山川・樓亭の名稱を持たない。そこでここでは、詩跡ごとに分類して示す。そのなかには、前掲のものと重なるものを含む。

【總池州詩】

□弄水亭（前掲二首） ○唐・杜牧 詩「〔春末題池州弄水亭〕」

「使君四十四、兩佩左銅魚」「亭宇清無比、溪山畫不如」（前掲は詩題のみ。ここでは二句ずつ分けて記す）

○唐・杜牧 「題〔池州〕弄水亭」 「弄水亭前溪、颺灩

翠綃舞。綺席草芊芊、紫嵐峰伍伍」（四句）

○宋・陳舜俞 詩「弄水亭」 「未識貴池好、嘗聞弄水名。

白鳥鑑中立、畫船天上行」

□清溪（前掲四首） ○宋・蘇子由（蘇軾の誤り。子由は弟の

蘇轍の字）詩「清溪行」 「大江南分九華西、泛秋浦兮青

「清」溪。…」（五句）

□齊山（前掲四首） ○宋・周邠 詩 「小杜池邊暫艤舟、

老齊山下共尋幽」（小杜は杜牧）

【秋浦詩】

○唐・李白 「秋浦歌」〔十七首〕（この秋浦は縣名）

「秋浦長似秋、蕭條使人愁。…」（四句、其の一）

「秋浦猿夜愁、黃山堪白頭。清溪非隴水、翻作斷腸流。…」

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

（八句、其の二）

「秋浦錦駒鳥、人間天上稀。山鷄羞綠水、不敢照毛衣」

（全四句、其の三）

「秋浦多白猿、超騰若飛雪。牽引條上兒、飲弄水中月」

（全四句、其の四。弄水亭の命名になった句）

「愁作秋浦曲、強看秋浦花。山川如剡縣、風日似長沙」

（全四句、其の五）

「秋浦千重嶺、水車嶺最奇」（其の七）

「君莫向秋浦、猿聲碎客心」（其の十）

○唐・李白「清溪〔半夜〕聞笛」 「羌笛梅花引、吳溪隴

水清。寒山秋浦月、腸斷玉關情」

○唐・李白「答杜秀才」五松山「見贈」 「千峰夾水向

秋浦、五松名山當夏寒」

○唐・杜牧 詩「池州送孟遲先輩」 「秋浦倚吳江、去轍

飛青鵲。溪山好圖畫〔畫圖〕、洞壑深閨闥」（四句）

○宋・蕭貫「清溪」 「山開明月峽、水寫武陵溪。…」

（四句。清溪は貴池縣〔唐代の秋浦縣〕を流れる清流）

★五代・南唐の徐鉉「天慶觀記」〔《輿地紀勝》卷二二、池州、
【風俗形勝】所引。徐鉉《騎省集》卷一二には、「池州重建紫極宮碑
銘」と題する〕に、「之を浸すに秋浦を以てし、之を鎮むるに

中國詩文論叢 第二十六集

齊山を以てす」とあるように、秋浦（清溪）と齊山は池州の風土を代表する江山であり、重要な詩跡となる。

【蕭相樓詩】（唐の大暦年間、蕭復が建て、杜牧が再建した樓閣）

○宋（？）・楊振 詩 「只思志業輸明主、豈爲登臨愛好山」

○宋・蔣之奇 詩 「紫嵐千嶂寒、清溪百里碧。公名山水俱、芬芳永無極」

○宋・徐璣 詩 「滿城風物來春色、萬里江山入酒盃」

○宋・蘇子由（轍）「呈滕侍郎「池州蕭丞相樓」」（二首、其の二）「樓成始覺江山秀「勝」、人去方知德業尊」

○宋・王鞏 詩「蕭相樓」 「…百尺樓高瞻故國、九華

山色倚晴眸。定知直道傳千古、杜牧文章在上頭」（全八句）

○宋・王鞏「過池陽「重登蕭相樓」」「不見當年兩翰林、江天爲我結層陰。九華門外柳三丈、蕭相樓前松十尋」（原注に「兩翰林は滕公甫・錢公礪を謂ふなり」とある）

【齊山詩】

○唐・杜牧「九日齊山登高」 「江涵秋影雁初飛、與客携壺上翠微。塵世難逢開口笑、菊花須插滿頭歸」（四句）

○宋・楊緘^{かん} 詩 「池陽佳致說齊山、公暇邀朋喜暫攀。浮

世謾同流水急、野僧長伴白雲閑」

○宋・蕭貫 詩 「秋風秋浦斷飛埃、路入齊山有梵臺。黃菊綻時君始至、紫微去後我重來」（紫微は紫微舍人「中書舍人」となった杜牧）

○宋・董儼 詩 「白雲深處訪禪扉、一簇樓臺鎖翠微」

○宋・董儼 詩 「千重遠木籠秋浦、萬里澄江浸落暉。醉恨春深輸杜牧、滿頭無菊戴將歸」（四句）

○宋・吳中復「齊山圖」 「當時齊映爲州日、從此山因姓得名。却自牧之賦詩後、每逢秋至菊含情。行尋古洞諸峰峭、坐看寒溪數曲清。…」」（八句）

○宋・王鐸「齊山圖」 「直自牧之懷古後、適當慧遠送圖來」

○宋・張伯玉「齊山圖」 「東南眞賞有齊山、路隔江湖到者難。絕筆掃成千仞翠、數峰高挂一堂寒。…」」（八句）

○宋・金君卿 詩 「秋浦南邊絕點埃、碧圍煙嶂一屏開。當時小杜行吟處、重見高陽騎從來」

○宋・鄭雍 詩 「訪古直尋齊守事、誦詩還愛紫微才」

（紫微は杜牧）

○宋・夏噩^{かく} 詩 「謝守風流爲勝事、杜郎吟詠屬多才」（杜郎は杜牧）

○宋・聞人安道 詩 「秋浦澄明郡境清、天然巖岫作南屏」
 ○宋・梅堯臣（王安石の誤り） 詩 「和王微之秋浦望齊山、感李太白・杜牧之」 「齊山置酒菊花開、秋浦聞猿江上哀。此地流傳空筆墨、昔人埋沒已蒿萊」（四句）

○宋・孫坦 詩 「世識池陽慣魚味、不知山勝環其郭」

○宋・劉定 詩 「岸岸俱垂釣、簷簷各見山。州侯行樂處、十里畫圖間」

○宋・沈遼 詩 「齊山偶題」（二首、其の一） 「杜子風情春水波、至今詩句使人夸。不知朽骨猶存否、山上年年黃菊花」

○宋・李夔 詩 「紫薇風韻謫仙身、曾此徘徊今幾春」（紫薇は杜牧）

○宋・狄咸 詩 「秋浦分光來郡閣、清溪送影落征船。翠微亭冠煙霞外、又遇携壺太守賢」

○宋（？）・吳荀 詩 「齊山最是清虛地、不信塵埃會染人」

○宋・陳續 詩 「齊山壓清溪、蒼崖浸老碧。……」（四句）

○宋・陳續 詩 「携壺上翠微、雅致何今昔。誰知一笑間、俯仰成陳跡」（最初の句は杜牧「九日齊山登高」詩中の句）

○宋・錢勰 詩 「來逢采石連江雪、坐見齊山拂檻梅」（きよう）

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

○宋（？）（詩人の名脱） 詩 「風流杜太守、黃花還引酌。……」（八句）

○宋・溫公（司馬光） 「齊山詩」呈王學士（哲、字微之）

「江南「上」有奇山、 群山「峰」轟如剪。昔聞齊刺史、置酒升絕巘。其人有惠政、嘉名自茲遠」（六句）

●【風俗形勝】の條に引く胡兆『秋浦志』序に、「九華・五松、齊山・清溪、秋浦・玉鑑」鏡之潭、水車之嶺、成紀・白筭之陂、「李」太白・「白」樂天・「杜」牧之、讀書論文、垂釣問宿、弄水登高、遐躅隱然、在人耳目云云」（筭の音はカ。遐躅は唐代詩人の足跡）とある。池州府内の詩跡が擧げられているが、これは山川に限定して述べたものに過ぎない。蕭相樓が池州の代表的な詩跡になっていたことを明示したのは、『輿地紀勝』の重要な貢獻であり、唐代の池州刺史、杜牧に始まる弄水亭も宋代詠み繼がれている。

池州を代表する詩跡が、杜牧以降歌い繼がれた齊山であることは、集録された詩の圧倒的な數量によって明らかである。松尾幸忠「池州における二つの詩跡―齊山と杏花村―」（『中國詩文論叢』第二五集、二〇〇六年所収）には、杜牧の「九日齊山登高」詩を念頭に置いた、別集類所収の宋詩、陳襄・章驥・梅堯臣・王安石（前掲の詩句）・郭祥正以下の作、二〇首を收

中國詩文論叢 第二十六集

めている。そのなかに、前掲の蕭貫・董儼・吳中復・王鐸・金君卿・鄭雍・夏噩・沈遼・李夔・陳續の詩人名が見えないことは、詩跡研究における『輿地紀勝』の價值を端的に物語るものであらう。

〔三〕南宋の祝穆原撰、子の祝洙増訂『方輿勝覽』卷一六、江東路池州の條に見える、池州市内の詩跡及びその候補に係するものは、以下の如くである。一二の詩跡に關する場合、一方の詩跡の條に置いた。

● 所收部門・詩跡・詩人・詩句（引用句數）の順に記述

「」内は、引用者の増補・訂正。また◎は『輿地紀勝』所收の詩。

【山川】

□齊山 ◎唐・杜牧之（牧）「九日齊山登高」 「江湖秋影

雁初飛、與客携壺上翠微。塵世難逢開口笑、菊花應「須」插滿頭歸。直須「但將」酩酊酬佳節、不用登臨怨落暉。古往今來只如此、牛山何必更「獨」沾衣」（全八句。『輿地紀勝』には前半四句を引く）

□水車嶺 ◎宋・郭功父（祥正）「追和李白秋浦歌」〔十七首〕（其の九） 「萬丈水車嶺、還如九疊屏。北風來不斷、六

月自水生」（全四句）

□玉鏡潭 ◎唐・李白「秋浦宴」〔與周剛清溪玉鏡潭宴別〕「

清溪玉鏡潭」〔席月開清罇〕、溪當大樓南」

□秋浦 ◎唐・李白 詩「清溪半夜聞笛」 「羌笛梅花引、

吳溪隴水清。寒山秋浦月、腸斷玉關情」

◎唐・李白 詩「秋浦歌」〔十七首〕 「秋浦多白猿、超

騰若飛雪。牽引條上兒、飲弄水中月」（全四句、其の四）

□白筇陂 ◎唐・李白 詩「遊秋浦白筇陂」（二首、其の二）

「白筇夜長嘯、爽然溪谷寒。魚龍動陂水、處處生波瀾」

【亭榭】

□弄水亭 ◎唐・杜牧 詩「春末題池州弄水亭」 「使君四

十四、兩佩左銅魚。……」（全一六句。『輿地紀勝』には四句を

收める）

□貴池亭 ◎唐・杜牧 詩「題池州貴池亭」 「勢比凌歊宋

武臺、分明百里遠帆開。蜀江雪浪西江滿、強半春寒去却來」

（全四句）

□如剡亭 ◎唐・李白 詩「秋浦歌」〔十七首〕 「愁作秋

浦曲、強看秋浦花。山川如剡縣、風日似長沙」（全四句、其

の五。『輿地紀勝』の【秋浦詩】にも見える）

□翠微亭 ◎宋・楊廷秀 詩序「詩題の誤り」 「從提舉黃元

章、登齊山寺後上清巖翠微亭、望郡城、左清溪、右大江、蓋絕境云」「西山落日浴長江、併貫清溪作一光、…客子要窮秋浦眼、翠微亭上上清旁」(全八句。『輿地紀勝』には見えない)

【樓臺】

□蕭相樓 ◎宋・王鞏 詩「蕭相樓」 「…百尺樓高瞻故

國、九華山色倚晴眸。定知直道傳千古、杜牧文章在上頭」

(全八句) (注：杜牧「池州重建蕭相樓記」を引く)

□九峰樓 ○唐・杜牧「登「池州」九峰樓寄張祜」詩 「百

感由來不自由、角聲孤起夕陽樓。…」(全八句。『輿地紀勝』

には詩題のみを引くが、詩句は引かない)

●『方輿勝覽』は『輿地紀勝』よりも小さな地理總志であるため、詩跡(その候補を含む)の數自體はほぼ同じであるが、引用する詩句の數量は格段に少なく、詩跡ごとに一首を引くのが一般的である。これは詩跡の持つ重要度を推し量ることを困難にするが、他方では各地に散在する詩跡の分布状況を容易に察知できる利便性がある。また齊山の翠微亭などでは、『輿地紀勝』と『方輿勝覽』は、それぞれ異なる詩人の作を引用する。やはり無視できない参照價值を備えている。

「四」趙萬里校輯『元一統志』には、池州路の條を缺いており、詩跡の著録狀況は全く不明である。

元の劉應李原編・詹有諒改編『大元混一方輿勝覽』卷下、池州路の條の、詩跡に關するものは、以下の如くである。

【景致】

□如剡亭 ○唐・李白 詩「秋浦歌」「十七首」 「山川如

剡縣、風日似長沙」(其の五。『方輿勝覽』にも見える)

□弄水亭 ○唐・杜牧 詩「春末題池州弄水亭」 「使君四

十四、兩佩左銅魚。…」(二二句。郭聲波整理本は四句を増補し、全篇を收録。『方輿勝覽』にも見える)

□九峰樓 ○唐・杜牧「登「池州」九峰樓寄張祜」詩 「百

感由來不自由、角聲孤起夕陽樓」(『方輿勝覽』にも見える)

●本條も、宣城市區と同様に南方地區に屬するため、基本的に『方輿勝覽』の極端な簡略であり、詩跡の考察における價值は乏しい。

「五」『寰宇通志』卷一二、池州府の條に見える、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。

【山川】

□齊山 ○宋・吳中復 詩「齊山圖」 「當時齊映爲州日、

中國詩文論叢 第二十六集

從此山因姓得名。却自牧之賦詩後、每逢秋至菊含情」(『輿地紀勝』の【齊山詩】の條に見えるが、『方輿勝覽』には收めない)

□水車嶺 ○唐・李白「秋浦歌」(詩句を引かない。これは、十首の其の七、「秋浦千重嶺、水車嶺最奇」を指す。『輿地紀勝』の【秋浦詩】の條に見えるが、『方輿勝覽』には收めない)

【樓閣】

□蕭相樓 ○宋・蘇軾 詩「呈滕侍郎池州蕭丞相樓」(二首、其の一)「樓成始覺江山秀」「勝」、人去方知德業尊」(『輿地紀勝』の【蕭相樓詩】の條に見えるが、『方輿勝覽』には收めない)

○宋・王鞏 詩「蕭相樓」 「百尺樓高瞻故國、九華山色倚晴眸」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

□九華樓 ○宋・陳舜俞 詩「題秋浦亭」 「只因山色好、來上九華樓」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見えない)

【堂亭】

□弄水亭 ○宋・陳舜俞 詩「弄水亭」 「未識貴池好、嘗聞弄水名。白鳥鑑中立、畫船天上行」(『輿地紀勝』には見えるが、『方輿勝覽』未收。注：「堂亭俱に久しく廢す」)

□翠微亭 ○宋・郭祥正(功甫) 詩「追和李白秋浦歌」[十

七首](其の十六) 「半空翠微亭、翫月動經宿。更待雨中來、林林看銀竹」(全四句。『輿地紀勝』には見えるが、『方輿勝覽』未收。注：「遺址尙存す」)

【題詠】

部門の名―題詠は、『方輿勝覽』と同じである。收録する詩は摘録ではなく、詩全篇を注するが、見出し語は『方輿勝覽』のような詩中の名句(二句)ではなく、詩題(その一部)が多い。従って前掲の□印のごとき、山川・樓閣・堂亭の名稱を持たない。それでここでは、詩跡ごとに分類して示す。

□秋浦 「秋浦歌」と題して、「秋浦長似秋、蕭條使人愁」で始まる唐・李白「秋浦歌十七首」の全篇を引く。これは『輿地紀勝』の【秋浦詩】の條に引く七首を上回る。全收録は明らかにバランスを缺くが、詩全篇を注する方針が徹底されたものか。

○唐・李白「清溪半夜聞笛」 「羌笛梅花引、吳溪隴水清。寒山秋浦月、腸斷玉關情」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

□玉鏡潭 ○唐・李白 詩「與周剛清溪玉鏡潭宴別」(見出し語になる) 「…席月開清罇、溪當大樓南。溪水正南奔、迴作玉鏡潭。…」(全三句。『輿地紀勝』は四句、『方輿勝覽』

は二句收録)

□江祖石 ○唐・李白「獨酌清溪江石上、寄權昭夷」 「我

携一尊酒、獨上江祖石。自從天地開、更長幾千尺。…」

(全一〇句、前掲の總志には見えない)

□清溪 ○唐・李白「宿清溪主人」 「夜到清溪宿、主人碧

巖裏。簷楹掛星斗、枕席響風水、…」(全六句。前掲の總志

には見えない)

□白筇坡 ○唐・李白「遊秋浦白筇坡」(二首) 「何處

夜行好、月明白筇坡。山光搖積雪、猿影挂寒枝」 「白筇

夜長嘯、爽然溪谷寒。魚龍動陂水、處處生波瀾」(『輿地紀

勝』は二首各四句、『方輿勝覽』は一首四句を收録)

□齊山 ○唐・杜牧 詩「九日齊山登高」 「江涵秋影雁

初飛、與客携壺上翠微。塵世難逢開口笑、菊花須插滿頭歸。

但將酩酊酬佳節、不用登臨怨落暉。古往今來只如此、牛山

何必淚「獨」沾衣」(『方輿勝覽』と同じ全八句。『輿地紀勝』

には前半四句を引く。見出し語は「九日登齊山」)

□翠微亭 ○宋・岳飛 詩「題池州翠微亭」 「經年塵土滿

征衣、特尋芳上翠微。好水好山看未足、馬蹄催趁月明歸」

(全四句。前掲の總志には見えない)

●『寰宇通志』には、『輿地紀勝』には見えるが、『方輿勝

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開(植木)

覽』未收の詩句もあり、翠微亭の場合は、『輿地紀勝』や

『方輿勝覽』には見えない宋・岳飛の著名な詩を引く。さら

に『方輿勝覽』には見えず、『輿地紀勝』に見える詩句をも

引用する。また江祖石のごとく、新たに掲げた項目もあるが、

詩作の繼承性には乏しい。

〔六〕『大明一統志』卷一六、池州府の條に見える、詩跡及

びその候補に關するものは、以下の如くである。

【山川】

□齊山 ○唐・杜牧「九日登山」 「九日齊山登高」 「江涵

秋影雁初飛、與客携壺上翠微。…」(前半四句。『寰宇通志』

は【題詠】に收めて全篇を引く。『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見

える)

○宋・吳中復 詩「齊山圖」 「當時齊映爲州日、從此山

因姓得名。却自牧之賦詩後、每逢秋至菊含情」(『寰宇通志』

『輿地紀勝』にも見える)

□水車嶺 ○宋・郭功父(功父は功甫。郭祥正のこと) 「和李

白詩」 「追和李白秋浦歌「十七首」(其の九) 「萬丈水

車嶺、還如九疊屏。北風來不斷、六月自氷生」(全四句。

『方輿勝覽』『輿地紀勝』にも見えるが、『寰宇通志』には見えない)

中國詩文論叢 第二十六集

□清溪 ○唐・李白 詩「宿清溪主人」 「夜到清溪宿、主人碧巖裏。簷楹掛星斗、枕席響風水」(和刻本は清溪を青溪に作る。『寰宇通志』に見える)

□秋浦 ○唐・李白 詩「秋浦歌十七首」 「愁作秋浦曲、強看秋浦花。山川如剡縣、風日似長沙」(全四句、其の五。『寰宇通志』「輿地紀勝」にも見える)

○唐・杜牧 詩「池州送孟遲先輩」 「秋浦倚吳江、去戲飛青鵲。溪山好圖畫「畫圖」、洞壑深閨闥」(『輿地紀勝』には見えるが、『寰宇通志』未收)

【宮室】

□蕭相樓 ○宋・蘇轍 詩「呈滕侍郎池州蕭丞相樓」(二首、其の一) 「樓成始覺江山秀「勝」、人去方知德業尊」(『寰宇通志』「輿地紀勝」にも見える)

□九華樓 ○宋・陳舜俞 詩「題秋浦亭」 「只因山色好、來上九華樓」(『寰宇通志』のみに見える)

□弄水亭 ○宋・陳舜俞 詩「弄水亭」 「未識貴池好、嘗聞弄水名。白鳥鑑中立、畫船天上行」(『寰宇通志』「輿地紀勝」にも見える)

□翠微亭 ○宋・郭祥正(功甫) 詩「追和李白秋浦歌「十七首」(其の十六) 「半空翠微亭、翫月動經宿。更待雨中

來、林林看銀竹」(全四句。『寰宇通志』「輿地紀勝」にも見える)

○宋・岳飛 詩「題池州翠微亭」 「經年塵土滿征衣、特尋芳上翠微。好水好山觀「看」未足、馬蹄催趁月明歸」(全四句。『寰宇通志』のみに見える)

●詩文の創作・鑑賞のための地理知識に重點が置かれた最後の地理總志『大明一統志』では、題詠門自體は削られたが、『寰宇通志』の題詠門に收められていた詩は、他の部門のなかに引かれており、大きな異同はない。『寰宇通志』に見える江祖石と白筈陂は見えないが、この二つは作詩の繼承性に乏しい場所である。また翠微亭における岳飛の詩は、明らかに『寰宇通志』を踏襲したものであろう。詩跡考察の面では、『寰宇通志』と『大明一統志』は、一方を見さえすれば大きな支障はなさそうである。

〔七〕 清の『嘉慶重修一統志』卷一一五、一一九、池州府の條に見える、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。

【山川】

□齊山 「唐の杜牧に『九日齊山登高』詩有り」とのみあ

り、詩句を引かない。また『方輿勝覽』のなかに見える《齊山の名は齊映にもとづく》という説は、宋の吳中復の詩、周必大の記にもとづくものであり、その齊映は池州刺史になっていないため、池州刺史となった齊照の誤りであろうとする。本書が詩跡の場所を考察する際に有用なことを表す例であるが、詩の引用は少ない。

【古跡】

□九華樓 「唐の杜牧に『九華樓、寄張祐「祐」』詩有り」とあるが、詩句を引かない。またこの杜牧詩は、じつは「登池州九峰樓寄張祐」詩（『方輿勝覽』『寰宇通志』にも見える）と題され、九華樓ではない。九華も九峰も同じく九華山を指し、『寰宇通志』卷一二には、兩樓は同じとする或説も見えるが：（『方輿勝覽』は兩樓を區別する）

【寺觀】

□太平羅漢寺 「唐の杜牧に『池州廢林泉寺』詩有り」とあるが、詩句を引かない。太平羅漢寺は唐の林泉寺の前身。『輿地紀勝』に引く杜牧の逸句？に、「廢寺碧溪上、今爲太平寺」とある（前述）

□齊山寺 「宋の楊萬里に『宿「池州」齊山寺、「即杜牧之九日登高處」』詩有り」とあるが、詩句を引かない。

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

●詞章の學への偏向が失われた『嘉慶重修一統志』は、詩跡研究の觀點からいえば、『輿地紀勝』『方輿勝覽』『寰宇通志』『大明一統志』よりも利用價值に乏しい。太平羅漢寺・齊山寺など、從來の地理總志には珍しい項目であるが、作詩の繼承に乏しい場所である。ただ齊山の名稱に關する論說など、廣く詩跡の場所の研究・確認には、やはり重要な文獻である。

第三章 山東省濟南市區

〔一〕唐の李吉甫撰『元和郡縣圖志』卷一〇、河南道六、齊州歷城縣の條には、濟南市區内にある華不注山などが見えるが、詩と關連する記事はない。

北宋初期の樂史撰『太平寰宇記』卷一九、河南道一九、齊州歷城縣の條にも、詩文との關連に言及しない。續く北宋中期の王存等撰『元豐九域志』卷一、京東路、齊州の條は、ただ行政區畫のみを記し、『新定九域志』卷一には、齊州の條を缺いている。北宋末の歐陽忞撰『輿地廣記』卷六、京東東路、齊州歷城縣の條にも、詩跡關連事項は見えない。

〔二〕南宋期を代表する王象之撰『輿地紀勝』と祝穆原撰、

中國詩文論叢 第二十六集

子の祝洙増訂『方輿勝覽』の兩地理總志は、基本的に南宋の領域内を對象としており、淮河以北の北中國（當時、金の支配下）については記さない。しかし『輿地紀勝』の撰者王象之は、二〇〇卷を完成した後、南宋の領域外の「西北諸郡も亦た次第に編集す」（自序）る計畫を抱いていた。それを裏づけるように、『大清一統志』『永樂大典』『記纂淵海』（南宋・潘自牧纂集）などの書物から、南宋の領域外の地に關する『輿地紀勝』の逸文が大量に發見されている。近年編纂された『輿地紀勝輯補』（『輿地紀勝』〔四川大學出版社、宋元地理志叢刊、二〇〇五年〕所收）卷二〇、濟南府、【景物】の條には、趵突泉などの名稱も見えるが、詩句の引用はない。詩の引用を缺く點は、『輿地紀勝輯補』に共通する特色であり、北中國の詩跡に對して果たす『輿地紀勝輯補』の價值は、極めて乏しい。

【三】 趙萬里校輯『元一統志』卷一、濟南路の條に見える、詩跡關連事項は以下のごとくである。

【山川】

□西湖（大明湖の異稱） 「南豐の曾鞏 郡を守りし日、詩有り」とあるが、詩句を引かない。

○宋・蘇轍 詩「和李誠之待制燕別西湖」 「……談笑萬事畢、尊疊與客俱。高情生遠岫、清興發平湖。坐使羈遊士、皆忘歲月徂。……」（全二六句）。さらにその長い序文も引用する。

【古跡】

□百花臺 宋・曾鞏 詩「百花臺」 「莫問臺前花遠近、試看何似武陵遊」（こゝも、「南豐の曾鞏 郡を守りし日、詩有りて曰く」として引く）

●西湖（大明湖）は、濟南市區を代表する詩跡であり、それが當地（齊州）の長官になった北宋の曾鞏に始まる、とする指摘は重要である。『元一統志』が殘缺していなければ、卷數の多さ（一三〇〇卷）から考えて、詩跡に關する豊かな情報が得られたであろう。僅かな斷片しか傳わらないのが惜しまれる。

●小型の地理總志、元の劉應李原編・詹有諒改編『大元混一方輿勝覽』卷上、濟南路の條は簡略であり、詩跡に關連する事項は全く見えない。これは重要な依據資料である『方輿勝覽』の記載が南宋の舊領のみであったため、詩に關する資料を容易に得られない状況を反映する。南宋の舊領下にあった宣城・池州との違いは明白である。

〔四〕『寰宇通志』卷七〇、濟南府の條に見える、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。

〔山川〕

□華不注山 ○唐・李白 詩「古風五十九首」（其の十八）

「昔我遊齊都、登華不注峰。茲山何峻秀、綠翠如芙蓉」

〔臺榭〕

□百花臺 ○宋・曾鞏 詩「百花臺」 「莫問臺前花遠近、

試看何似武陵遊」（『元一統志』に見える）

□黃臺 ○金・任詢 詩「濟南黃臺」（三首、其の三） 「綠

樹「柳」橋邊簇錦鞍、紅紗影裏照煙鬢。歸來書几高燒燭、

渾似江鄉一夢間」

〔井泉〕

□金線泉 ○宋・曾鞏 詩「金線泉」 「雲依美藻爭成縷、

月照寒「靈」漪巧上絃」（金線泉と金絲泉は同じ泉であろう。

或いは一方が誤りか）

□舜泉 ○宋・歐陽脩 詩有り、題詠に見ゆ」とある。（後

引）

〔題詠〕

收録する詩は摘録ではなく、詩全篇を注するが、掲げる語

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

は詩題（その一部）が多い。前掲の□印のごとき、山川・臺

榭・井泉の名稱を持たないため、詩跡ごとに分類して示す。

□歷下亭 ○唐・杜甫 詩「陪李北海宴歷下亭」 「東藩駐

皂蓋、北渚凌清河。海右此亭古、濟南名士多。雲山已發興、

玉佩仍當歌。脩竹不受暑、交流空湧波。…」（全二句）

□鵲山湖 ○唐・李白 詩「陪從祖濟南太守汎鵲山湖」（三

首） 「初謂鵲山近、寧知湖水遙。…」（全四句。其の二）

「湖闊數千里、湖光搖碧山。…」（全四句。其の二）「水入北

湖去、舟從南浦回。…」（全四句。其の三）

○唐・杜甫 「湖上懷李員外」 詩 「野亭逼湖水、歌馬高

林閒。鼉吼風波「奔」波、魚跳日映山。…」（全八句）

□舜泉 ○宋・歐陽脩 詩「留題齊州舜泉」 「…虞舜已

死三千年、耕田浚井雖鄙事、至今遺址「跡」尚依然、歷山

之下有寒泉。…」（全一八句）

□華不注山 ○宋・曾鞏 詩「華不注山」 「虎牙千仞立儼

儼、峻拔遙臨濟水南。翠嶺嫩嵐晴可掇、金輿陳跡久誰探。…」

（全八句）

□趵突泉 ○元・趙孟頫^ふ 詩「趵突泉」 「灤水發源天下無、

平地擁出白玉壺。…雲霧潤蒸華不注、波濤聲震大明湖。…」

（全八句）

中國詩文論叢 第二十六集

□舜祠 ○元「金」・元好問 詩「舜泉、效遠祖道州府君體」
 「重華初側陋、營「嘗」耕歷山田。至今歷城下「下城」、有此東隱「西」泉。喪亂二十載、祠宇爲灰煙。鹵「兩」泉廢不治、漸着瓦礫墳。…」(二八句、二句脫。舜泉は舜祠のほとりにある)

●北中國にあつては、大型の地理總志『元一統志』がほとんど失われた現在、明代の『寰宇通志』が、詩跡及びその候補に關するものを調べるうえで、最初のもとまった地理總志である。この意味で南宋期の詳しい『輿地紀勝』や『方輿勝覽』を活用できる南中國とは、大きく異なっている。しかも『寰宇通志』は、各項目ごとに一首の詩だけを引く傾向を持ち、作詩の繼承性を推測することは困難である。しかし唐の李白・杜甫、宋の曾鞏・歐陽脩、金の元好問、元の趙孟頫らによって、濟南の詩跡が形成されていたことを理解することができる。

「五」『大明一統志』卷二二、濟南府の條に見える、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。なお◎は『寰宇通志』に收める詩である。

【山川】

□華不注山 ◎唐・李白 詩「古風五十九首」(其の十八)
 「昔我遊齊都、登華不注峰。茲山何峻秀、綠秀「翠」如芙蓉」(全一〇句)

□鵲山 ○宋・曾鞏 詩「鵲山」 「一峰孤起勢崔嵬、秀色掣藍入酒盃。…」(八句。『寰宇通志』に見えない)

□鮑山 ○宋・曾鞏 詩「鮑山」 「雲中一點鮑山青、東望能令兩眼明。若道人心是矛戟、山中那得叔牙城」(全四句、『寰宇通志』に見えない)

□大明湖 (=西湖) ○宋・曾鞏 詩「西湖」(二首、其の二)
 「湖面平隨葦岸長、碧天垂影入清光。一川風露荷花曉、六月蓬瀛燕坐涼。…」(全八句。和刻本は大明湖を大明河に誤る。『寰宇通志』に見えない)

□鵲山 ◎唐・李白 詩「陪從祖濟南太守泛汎鵲山湖」(三首、其の二) 「湖闊數千里、湖光搖碧山。…」(全四句)

□趵突泉 ◎元・趙孟頫 詩「趵突泉」 「灤水發源天下無、平地擁出白玉壺。… 雲霧潤蒸華不注、波濤聲震大明湖。…」(全八句)

□金線泉 ◎宋・曾鞏 詩「金線泉」 「王「玉」甃常浮灝氣鮮、金線「絲」不定路南泉。無風到底塵埃盡、界破水綃「霜」一片天」(四句。中間の四句を略し、『寰宇通志』に見え

る二句を缺く。また『寰宇通志』と同様に、金線泉を掲げながら「金線泉」詩を引く）

□舜泉 ○宋・曾鞏 詩「舜泉」 「山麓舊耕迷故壟、井幹餘汲見飛泉。清涵廣陌能成雨、冷浸平湖別有天」〔『寰宇通志』には見えない〕

【宮室】

□歷下亭 ◎唐・杜甫「陪李北海」燕「宴」歷下亭」詩
「東藩駐皂蓋、北渚凌清河。海右此亭古、濟南名士多。雲山已發興、玉佩仍當歌。脩竹不受暑、交流空湧波。…」
(全一二句)

□鵲山亭 ○宋・曾鞏 詩「鵲山亭」 「大亭孤起壓城顛、屋角峨峨插紫煙。灤水飛綃來野岸、鵲山浮黛入晴天」(全四句。『寰宇通志』には見えない)

□北渚亭 ○宋・曾鞏 詩「北渚亭」 「四楹虛澈地無隣、斷送孤高與使君。…」(全八句。『寰宇通志』には見えない)

□水香亭 ○宋・曾鞏 詩「水香亭」 「…群玉過林抽翠竹、雙虹垂岸跨平橋。煩「頻」依美藻魚爭餌、清見寒沙水滿橈。莫問荷花開幾曲、但知行處異香飄」(全八句。『寰宇通志』には見えない)

□環波亭 ○宋・曾鞏 詩「環波亭」 「…楊柳巧含煙景

中國歷代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開(植木)

合、芙蓉爭帶露華開。城頭山色相圍出、簷底波聲四面來。…」
(全八句。『寰宇通志』には見えない)

□百花臺 ◎宋・曾鞏 詩「百花臺」 「煙波與客同樽」
酒、風月全家上采舟。莫問臺前花遠近、試看何似武陵遊」
(全四句。『元一統志』『寰宇通志』には、後半二句のみ)

□黃臺 ◎金・任詢 「登臺」詩「濟南黃臺」(三首、其三)
「綠樹「柳」橋邊簇錦鞍、紅紗影裏照煙鬟。歸來書几高燒燭、渾似江鄉一夢間」〔『寰宇通志』に見える〕

【關梁】

□百花橋 ○宋・曾鞏 詩「離齊州後」(五首、其の四)
「從此七橋風與月、夢魂長到木蘭舟」〔『寰宇通志』には見えない〕

□芙蓉橋 ○宋・曾鞏 詩「芙蓉橋」 「雁翅橫連杜若洲、碧闌干影在中流。…」(全四句。『寰宇通志』には見えない)

●南方の宣城・池州においては、『寰宇通志』と『大明一統志』は、一方を見ええすれば、大きな支障はないように思われた。しかし北方の濟南の場合、『大明一統志』は、『寰宇通志』には見えない鵲山・鮑山・大明湖・舜泉・鵲山亭・北渚亭・水香亭・環波亭・百花橋・芙蓉橋の一〇項目において、詩句を引いている。(ただし『寰宇通志』に見える舜祠を缺く)

中國詩文論叢 第二十六集

もちろん、その大半は作詩の繼承性に乏しい場所であり、しかもその全てが北宋の曾鞏の詩である。この點を念頭に置いて、『大明一統志』のほうで、詩句の引用が多いことは明らかであり、詩跡研究では『寰宇通志』よりも重視すべきであろう。

〔六〕『嘉慶重修一統志』卷一六二―一六四、濟南府の條に見える、詩跡及びその候補に關するものは、以下の如くである。

【山川】

□華不注山 「本朝〔清〕乾隆十三年、高宗純皇帝東巡し、御製『華不注山』『華不注』の詩有り」とあるが、詩句を引かない。

□趵突泉 「本朝康熙二十三年、聖祖仁皇帝、濟南に駕幸し、額を賜ひて「激湍」と曰ひ、「源清流潔」と曰ひ、並びに御製『趵突泉』『趵突泉、留題源清流潔四字』の詩あり。

乾隆十三年、高宗純皇帝東巡して此を經、御製『聖祖の趵突泉の韻に次す』『恭依皇祖趵突泉詩韻』、及び『再び趵突泉に題す』の諸詩有り」とある。

□珍珠泉 「本朝康熙二十三年、聖祖仁皇帝、扁に御書して

「清漪」と曰ひ、二十八年、再び幸して、扁を賜ひて「作霖」と曰ひ、並びに御製『珍珠泉を觀る』の詩あり。乾隆十三年、高宗純皇帝東巡し、亦た御製『珍珠泉』の詩有り」とある。

【古跡】

□會波樓 「本朝乾隆十三年、高宗純皇帝東巡して此に登り、御製『會波樓』『登會波樓』の詩有り」。

□歷下亭 「杜甫の詩『陪李北海宴歷下亭』に、『海右此亭古し』と。…本朝乾隆十三年、高宗純皇帝東巡し、御製『歷下亭』の詩『三首』有り」とある。

□水香亭 「曾鞏に詩『水香亭』有り」。(歷下亭の條に言及。『大明一統志』に見える)

□北渚亭 「曾鞏・元の郝經^{カウ}、皆な詩有り」とのみある。(曾鞏の詩『北渚亭』は『大明一統志』に見える。ちなみに郝經の詩は、「使宋過濟南宴北渚亭」である)

□房家園 ○北齊・尹孝逸 詩「風淪歷城水、月倚華山樹」(二句。華山は華不注山。唐・段成式『酉陽雜俎』卷一二、語資篇に見える)

【津梁】

□鵲華橋 (百花橋は、その古名) ○宋・曾鞏 詩『離齊州後』

（五首、其の四） 「從此七橋風與月、夢魂長到木蘭舟」

（『大明一統志』に見える） さらに「本朝乾隆十三年、高宗

純皇帝東巡して此を經、御製『鵲華橋』の詩「三首」有り」

□灤源橋 「蘇轍に詩有り」とあるが、その詩は未詳。（灤の音はラク）

【祠廟】

□舜祠 「本朝乾隆十三年、高宗純皇帝東巡して此に登り、御製『舜廟に謁す』の詩有り」とある。

●濟南市區における『嘉慶重修一統志』の記載は、清の康熙帝・乾隆帝の作詩記事が多いことを特徴とする。それは、本書が清朝官修の地理總志であるための、當然の歸結であろうが、注意すべき點は、兩帝が作詩した華不注山・趵突泉・歷下亭・水香亭・鵲華橋・舜祠などは、大半が詩に詠みつけられた場所であった。この意味では、兩帝の詩も詩跡研究に全く無價值なわけではない。他方、會波樓は乾隆帝が作詩したために設けられた新項目である。また房家園は、從來の地理總志に見えないものであるが、作詩の繼承性に乏しい場所である。『嘉慶重修一統志』の詩跡關連の記事は皇帝中心であるため、北方の廣範な詩跡を考察するうえでは『寰宇通志』や『大明一統志』よりも劣るが、詩跡の場所の確認等には、

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

やはり重要な文獻である。

【小 結】

南方の安徽省宣城市區と池州市、および北方の山東省濟南市區を通して、詩跡（それに準じるものを含む）が、中國歴代の地理總志―唐代の『元和郡縣圖志』、北宋期の『太平寰宇記』『元豐九域志』『輿地廣記』、南宋期の『輿地紀勝』『方輿勝覽』、元代の『元一統志』（殘缺）『大元混一方輿勝覽』、明代の『寰宇通志』『大明一統志』、清代の『嘉慶重修一統志』―のなかに、どのように著録されているのか、それぞれの總志が持つ特色と關連づけながら具體的に見てきた。

この結果、ひとまずこう言えるであろう。唐代・北宋期の地理總志には、詩句の引用はほとんど見られない。ただ『太平寰宇記』のみは、まれに詩句を引く場合もあるので注意しなければならない。

こうした狀況は、南宋期、民間で編纂された『輿地紀勝』や『方輿勝覽』において、大きく變貌した。この兩書は、いわば詩文の創作・鑑賞のための地理知識に重點を置いた、新傾向の詳細な地理事典であった。「詩」（『方輿勝覽』では「題詠」）の部門が新たに設けられている。特に王象之撰『輿地

中國詩文論叢 第二十六集

『紀勝』は、現存する地理總志の中で、最大の規模で各地を詠みこんだ詩を意欲的に集録し、それと緊密な一體感のもとに想起される場所、いわゆる詩跡を多く著録した。なかでも詩跡ごとに多数の詩を分類・集録した区分けは、地理總志のなかでは唯一の試みであり、詩跡研究の觀點から特に注目に値する。

『輿地紀勝』のコンパクトな形態を持つ『方輿勝覽』は、『輿地紀勝』が保有する多大・猥雑なエネルギーには缺けているものの、かえって主要な詩跡の状況を容易に知りうる利便性を備えている。

『元一統志』の殘缺が惜しまれるが、小型の地理總志『大元混一方輿勝覽』は、詩跡考察のうえでは参照價值に乏しい。續く明代の『寰宇通志』と『大明一統志』は、『方輿勝覽』なみのレベルで詩跡と作品を收録しており、いわゆる詞章の學に偏った最後の地理總志として、充分参照すべき文獻である。ただこの兩書は編纂年代が續き、資料も類似しているため、南方の地域の場合、一方を調査すれば大きな支障は生じないであろう。

南宋期の『輿地紀勝』と『方輿勝覽』は、基本的に南宋の領域のみを対象とした編纂物であり、一三〇〇巻の規模を誇っ

た『元一統志』がほとんど失われた現在、『寰宇通志』と『大明一統志』の兩書が、北中國の詩跡の著録を調べるうえで、最初のまとまった地理總志となっている。言い換えれば、淮河以北の北中國の場合は、兩書の丹念な調査が必要であり、『寰宇通志』には見えない『大明一統志』の事項には特に注意すべきである。

清代の『嘉慶重修一統志』は、詩句自體の引用は乏しいが、地理總志の最高レベルとして、詩跡の場所の確認には必須の文獻である。

【注釋】

- (1) 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』（吉川弘文館、一九六九年再版）に收める「唐宋時代の總誌及び地方誌」（四六三〜四頁）にいう、――地理總志のなかに詩を引用するのは、北宋初期の樂史撰『太平寰宇記』に始まるという（『四庫全書總目提要』卷六八、地理類一、『太平寰宇記』の條）が、『太平御覽』卷五九、地部・水下に引く『方輿記』のなかに土地ゆかりの詩を引用しており、その萌芽は五代・南唐の徐鉉等撰『方輿記』一三〇卷（散逸）であろう、と（要約）。

- (2) 松尾幸忠「中國における『詩跡』形成についての試論―日

本の『歌枕』との比較考察から―」（『日本中國學會報』第五集、一九九九年）、植木久行「中國における『詩跡』の存在とその概念―近年の研究史を踏まえて―」（村山吉廣教授古稀記念 中國古典學論集』汲古書院、二〇〇〇年所收）など参照。

- (3) 黄永年『唐史史料學』（上海世紀出版集團・上海書店出版社、二〇〇二年）九三頁以下によれば、『太平寰宇記』は、やや後の雍熙年間（九八四〜九八七）、作者が史館詰めのときに完成した。これは私撰のために完成が遅れたのだと推測する。成書は遅くとも雍熙三年（九八六）以前と見なす説もある。

- (4) 清の王謨輯『漢唐地理書鈔』（中華書局、一九六一年）所收の『永初山川記』の輯本には、賽神を「賽雨」に作る。

- (5) 『アジア歴史研究入門』第三卷、中國Ⅲ（同朋舎出版、一九八三年）に収める梅原郁「Ⅱ 歴史地理學」（4 地志をめぐって）参照。「百科全書的な中國總志の祖型は『寰宇記』におかれよう」ともいう。

- (6) 松尾幸忠「北宋時期の書物に見られる詩跡的觀點について」（『松浦友久博士追悼記念 中國古典文學論集』研文出版、二〇〇六年所收）。

- (7) 『四庫全書總目提要』卷六八、地理類一、『太平寰宇記』の條には、「後來の方志（總志・方志を含めた廣義の用法）、必ず人物・藝文を列める者は、其の體 皆な史（樂史）に始ま中國歷代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

る」という。青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』四六五頁には、「往々詩を引用し」、「詩を引くは徐鍇の方輿記の所で述べた通り寧ろ一段と豊富にしたものと云うべく」云々とある。確かに卷一、東京上、開封府浚儀縣、望京樓の條に、唐の節度使令狐陶（令狐楚の誤り）の「登臨詩」を引き、卷八九、潤州丹徒縣、甘露寺・金山寺の條に、唐の盧肇・張祐・周樸・孫昉の詩が引かれ、「二寺は江山の勝絶爲り。復た名人の篇什有り。故に之を紀す」などの例も見えるが、本書全體にわたって、詩が豊富に引かれているわけではない。

- (8) 同書の前言（王文楚・魏嵩山）によれば、『元豐九域志』は元豐三年に完成したが、その後も修訂を行い、所載の政區（行政區）は元豐八年の制であり、その刊行は元祐元年（一〇八六）正月以後という。

- (9) 『新定九域志』一〇卷は、政區・沿革・地里・戸口・土貢等の項目は、基本的に『元豐九域志』と同じであるため、新たに増補された「古蹟」の部門のみを録出した、王文楚・魏嵩山點校『元豐九域志』の附録（中華書局、中國古代地理總志叢刊）による。『新定九域志』は『新定元豐九域志』とも呼ばれる。

- (10) 李勇先「前言」（『輿地紀勝』四川大學出版社、宋元地理志

中國詩文論叢 第二十六集

叢刊、二〇〇五年）一二五頁以下の、『勝覽』編纂體裁的確立主要是受當時方志的影響」参照。また松尾幸忠「南宋の地方志に見られる詩跡的觀點について」（早稻田大學『中國文學研究』第三期、二〇〇六年）も参照に値する。

- (11) 『輿地紀勝』については、鄒逸麟『輿地紀勝』の流傳及其價值（『輿地紀勝』中華書局、一九九二年所收。『古籍整理與研究』第七期、一九九二年にも收める）や、李勇先「前言」（『輿地紀勝』四川大學出版社、宋元地理志叢刊、二〇〇五年、これとほぼ同じ内容は、すでに李勇先『輿地紀勝』研究（『巴蜀書社、一九九八年』のなかに見える）参照。鄒逸麟の説によれば、『輿地紀勝』の初刻は、紹定初年（紹定元年は一二二八年、寶慶三年の翌年）であり、その六二〇余年後、清の道光二九年（一八四九）になって、ようやく再刊された（岑氏懼盈齋本）。いいかえれば、宋代から清代にかけて『輿地紀勝』はあまり流布せず、清初一度失われ、四庫全書にも未收である。これは、類似の内容を備えた簡略本『方輿勝覽』が廣く流布していたために、『輿地紀勝』は必備の書物にならず、しだいに流傳を斷つたらしい。ちなみに、李德清『輿地紀勝』的成書年代（『古籍整理與研究』第七期、一九九二年所收）にいう、『紀勝』一書自序作於嘉定十四年（一二二二）。其所述歷史沿革、以理宗寶慶三年（一二二七）爲斷、如需指明具體月份、似可斷在七月。其最後成書、則不早於寶慶三年末」と。

- (12) 譚優學「前言——論『方輿勝覽』的流傳與評價問題」（『宋本方輿勝覽』上海古籍出版社、一九九一年。これは早くも『中華文史論叢』一九八四年第四輯の中に、副題の名で發表された論文）に、『元和志』『寰宇記』只是偶或引用前人詩文片言隻語。『紀勝』除專闢詩（題詠・四六兩門外、又都搜羅了大量與一地風俗・形勢・景物・人物有關的詩・賦・記述文字、分繫於各門各條之下」とあり、鄒逸麟『輿地紀勝』的流傳及其價值（『輿地紀勝』中華書局、一九九二年所收）にもほぼ同じく、『元和志』『寰宇記』只是偶而引用前人詩文的片言隻語。『紀勝』除了新增詩・四六二門專輯錄前人詩文外、又搜集了大量與一地風俗形勝・景物・古跡・人物有關的詩・賦・記述文字、分繫於各門各條之下」と指摘されている。また、梅原郁「Ⅱ 歷史地理學」（前掲）にいう、「著者自身および兄弟たちの各地での見聞と地理的文獻の蒐集をもとに、風俗、形勝、山川の景物や人物などをことこまかに列記し、碑記や詩にも多くの部分をさく。つまりこれは詩文作製のための詳細な地理的事典であり、人物なども、傳記の關心よりも、その地域を詠む詩文に彼らを點綴する目的でとりあげられている傾向が強い」と。

- (13) 王象之の自序にいう、「至若收拾山川之精華、以借助於筆端、取之無禁、用之不竭、使騷人才子於一寓目之頃、而山川俱效奇於左右、則未見其書。此『紀勝』之編、所以不得不作也」と。ただ意味内容を正確に取りがたい箇所があるので、

李軍の序に引く王象之の言葉、「我書收拾天下郡縣山川之精華、使人於一寓目之頃、而山川俱若效奇於左右、以助其筆端、取之無禁、用之不竭」を参照して理解した。

- (14) 林宜陵『采石月下聞謫仙——宋代詩人郭功甫』（秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇六年）参照。

- (15) 李勇先「前言」『輿地紀勝』四川大學出版社、宋元地理志叢刊、二〇〇五年）にいう、「紀勝」成書於寶慶三年九月、書中所載之事還及於紹定・嘉熙年間、而『勝覽』於嘉熙三年寫成刊印、若從成書時間先後來看、兩書相距甚近」と。

- (16) 呂午の序にいう、「學士大夫端坐窓几而欲周知天下、操弄翰墨而欲得助江山、當覽此書、毋庸他及」と。毋庸は、…するに及ばない意。

- (17) 譚優學「前言——論『方輿勝覽』的流傳與評價問題」（『宋本方輿勝覽』上海古籍出版社、一九九一年）には、『方輿勝覽』が廣く流布した理由について、こういう、「因爲宋人在撰寫表啓文時、例須用四六儷語、爲樓閣亭堂作記敘文的風氣、也盛極一時。元明時代、四六之風雖漸衰歇、記敘文仍流行勿替。所以這部書正投合了這一段時期內文人墨客的需要」と。李勇先「前言」（前掲）一三九頁にいう、「四六之作不僅爲文字大家所樂用、而且與宋代科舉以及官場用文習尚密接相關、『朝廷以此取士、名爲博學宏詞、而內外兩制用之、四六之藝、咸曰大矣。下至往來箋記啓狀、皆有定式。故謂之應用、四方一律』」と。應用とは、四六駢儷文を指す。

中國歴代の地理總志に見る詩跡の著録とその展開（植木）

- (18) 施和金點校『方輿勝覽』は、上海圖書館所藏の咸淳三年、吳堅・劉震孫刻本を底本とする。

- (19) 『方輿勝覽』については、譚優學「前言——論『方輿勝覽』的流傳與評價問題」（前掲、施和金「前言」『方輿勝覽』中華書局、中國古代地理總志叢刊、二〇〇三年）参照。

- (20) 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』四七五頁にいう、「この兩書は撰者が多年各地を周行し諸書を涉獵したものの丈に治政の參考に供することは極めて略で、地方文化に詳しく、宦遊之士が名勝舊蹟を探るに誠に好適のものであったのである。…前代のことを詳記し、詩文を豊富に掲載すると共にその出典を示す一方、傳説的記載は稀で時に考證をも附するは述ぶべき特色である」と。

『四庫全書總目提要』卷六八、地理類一、『方輿勝覽』の條にいう、「惟だ名勝古跡に於いてのみ、臚列する所多し。而して詩賦序記は、載する所獨り備はる。蓋し登臨題詠の爲にして設け、考證の爲にして設けず。名は地記爲るも、實は則ち類書なり。…文章に益有り。摘藻採華（華麗な表現）は、恆に引用する所。故に宋元より以來、操觚家（文字を書く人、文學者）は、其の書を廢せず」と。ただ四庫館臣が、『輿地紀勝』を見ていないことには注意しなければならない。登臨題詠のために設けたのは、むしろ王象之の『輿地紀勝』のほうであり、『方輿勝覽』ももちろん役立つが、編纂目的は主に四六表啓文を作成する用途に應えるためであった。（譚優學

中國詩文論叢 第二十六集

「前言—論『方輿勝覽』的流傳與評價問題」(參照) いわば文學的必要を満たす作詩文用の地誌で、日本でも室町時代盛んに愛用されている。

清初の顧祖禹『讀史方輿紀要』凡例に、「勝覽」以下(の地理書)は、皆な詞章の學(詞章之學)に偏る」とある。詞章の學(詞章之學)に偏るとは、名勝古跡や人物を中心とした、詩文の創作・鑑賞のための地理知識を重視して、國計や民政に關わる地域の實態を捉えるものではないことをいう。後述の『大明一統志』も、そうした「詞章の學」を代表する地誌であった。大澤顯浩「詞章之學」から「輿地之學」へ—地理書にみえる明末」(『史林』第七十六卷第一號、一九九三年)參照。ちなみに「輿地之學」とは、經世致用を重視する地理書を指す。

- (21) 本書の解説は、郭聲波整理『大元混一方輿勝覽』(四川大學出版社、宋元地理志叢刊、二〇〇三年)に收める「整理者辯言」による。『大元混一方輿勝覽』は「聖朝混一方輿勝覽」とも記される。なお『方輿勝覽』の祝穆・祝洙父子と『大元混一方輿勝覽』の劉應李の兩家は、同じ建寧府建陽縣(福建省)出身で、代々つきあいがあったという。また詹有諒も建寧路建安縣の人で、劉應李の學生であらうという。

- (22) 譚優學「前言—論『方輿勝覽』的流傳與評價問題」(參照)。山根幸夫「大明一統志について」(『和刻本 大明一統志』汲古書院、一九七八年、上卷所收)參照。それには、「多少

の異同點を挙げれば、公廨が公署に、宮殿・樓閣・堂亭・池館・臺榭を併せて宮室に、橋梁を關梁に改めている。また、館驛・關隘・井泉・選譚・科甲・題詠の各項を刪去し、流寓・列女・仙釋の三項を増加している。しかし、これらの項目の出入はそれ程大きな違いとはいえないだろう」という。

- (24) 渡部武「中國明代の旅行家徐霞客の旅と飲食」(神崎宣武編『食の文化フォーラム20 旅と食』ドメス出版、二〇〇二年所收)參照。

- (25) 『四庫全書』所收の『大清一統志』五〇〇卷(四二四卷、子卷を加えると五〇〇卷)は、第二次版(乾隆二十九年敕撰本)である。

- (26) 諸書に見える逸文のほかに、清の岑建功編『輿地紀勝補闕』一〇卷、李裕民『輿地紀勝輯佚』を加えて編纂された。ちなみに、この大量の逸文については、その信憑性を否定する説もある(譚優學「前言—論『方輿勝覽』的流傳與評價問題」など)。

「本稿は、科學研究費補助金(基盤研究(B))「詩跡(歌枕)研究による中國文學史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に關する研究—」(研究課題番號 一七三二〇〇五、研究代表者植木久行)の研究成果の一部である」